

近世書畫鑑定寶典





杉原夷山先生著

近古書畫鑑定寶典

東京 文明堂藏版



東京 文肥堂藏

古今圖書集成

沐東夷山人著

序

展而觀之。不覺正衣襟。挂而讀之。使清心目者。於鴻儒  
碩學之書畫。乎見之。蓋書畫者。人之心影也。其人既高。  
故其書畫亦高。且胸中書卷。自溢出楮墨間者。洵非偶  
然也。余愛書畫。最喜儒家所作者。每遭一名蹟。典衣減  
食以購之。既得。則示同人。誇耀以爲快。又好藻鑑。人謬  
以爲具眼。余亦不自揣。覩然膺之。一日愛溪井汲君來。  
請編一書。以資儒家書畫鑑定。余則選寬政以降諸儒。  
評其學問文詩。論其書畫風格。且收其引首及款印。哀  
爲一冊。題曰書畫鑑定寶典。輒近賞玩。儒家書畫者多。



序  
二  
矣。而價日益貴。是以贗作頻出。驥驚爲伍。珠礫同架。賞  
玩家苦難認真。或投厚貲。以購贗物。噬臍不及者。比比  
皆是。豈可不慨歎乎。本書雖率爾所輯。諸家眞面目略  
具。賞玩家置之座右。以資藻鑑。自能知諸家書畫風格。  
心領神會。亦庶幾乎別驥驚珠礫。免狡獪之欺罔矣。果  
然則區區一小著。亦未無所益於同好之士也。  
大正乙卯冬十一月。識於麻溪幽竹莊。

杉原夷山

例言

一 儒家の書畫皆詞翰の餘適、一時の興趣のみ、而かも風格自ら高く書卷の  
味、人の眉宇を撲つ。輒近之を賞翫するもの多く、其價日に貴し。是を以て  
奸商猾賈、模造贗作、以て人を欺き利を貪る。魚目燕石、珠玉に訛誤す。本編  
則ち之が鑑定に資す。  
一 徳川氏の三百年、儒學名家林立す。而して本編寛政以降の諸儒を選びて  
之を録し、安永天明以前に及ばず。安永天明以前は、世代既に遠く、諸儒の  
遺墨獲易からず。其況く世人の賞玩する所は、寛政以降のものなるを以  
てなり。  
一 本編諸儒に就きて、先づ其學問文詩を評し、次ぎに書畫の風格を論じ、且  
つ落款を收む。



一 諸儒父子兄弟及門人は則ち帶叙し之を其父師に附す例へば栗山の後に碧海を録し、鵬齋の後に綾瀬鶯谷を録す。

一 書畫鑑定に資するの書從來坊間に流布するもの多し然れども皆大同小異唯諸家の小傳を輯むるに過ぎず其落款を收むるものも亦蹈襲剽竊數刻遞傳殆ど其眞を失す以て信を取るに足らざる也本編固より寥寥たる一小冊子と雖庶幾くは是等幾多の類書に勝らむ。

一 儒家書輶詠史若くは其人一代の秀吟を筆せるものは價貴し又其人の會心の作となすものに非ずと雖汎く人口に膾炙するものあり是亦價廉ならず本編則ち諸儒に就きて其詩を選み以て之を釐頭に録す。

一 文化文政前後文運隆興碩學鴻儒輩出し且風流韻事此時を以て最も盛なりとす其名千秋に朽ちず遺墨萬世に賞玩せらるゝもの擧げて數ふべからず而かも本編の此に止むるものは紙數に限りあるを以ての故

のみ其遺す所の關西古學四大家中井竹山兄弟九州の龜井南冥父子田能村竹田廣瀬淡窓兄弟等の諸家を知らんと欲せば則ち請ふ他日續編の上木を俟て。

夷山人識



目次

●寛政三博士

一 儒學の諸派……………	一
二 松平定信の文武振興……………	三
(一) 柴野栗山……………	六
○ 柴野碧海……………	七
(二) 尾藤二洲……………	九
(三) 古賀精里……………	一〇
○ 古賀穀堂……………	一一
○ 古賀侗庵……………	一二
○ 古賀茶溪……………	一五

●寛政五鬼

(一) 伊藤蘭田……………	一七
(二) 豊島豊洲……………	一八
(三) 市川鶴鳴……………	一九
(四) 塚田大峰……………	一九
(五) 戸崎淡園……………	二〇
●寛政異學二大家	
(一) 山本北山……………	二二
○ 山本綠陰……………	二三
(二) 龜田鵬齋……………	二四
○ 龜田綾瀬……………	二六
○ 龜田鶯谷……………	二八



●太田錦城	二八
●江戸詩學四大家	
一 爲唐詩の排撃	三一
二 宋詩の鼓吹	三二
(一)市河寛齋	三三
(二)柏木如亭	三四
(三)大窪詩佛	三六
(四)菊池五山	三七
●葛西因是	三九
●十時梅厓	四一
●頼氏一門	
(一)頼 春水	四五
○梅颯女史	四七
(二)頼 春風	四八
(三)頼 杏坪	四八
(四)頼 立齋	五〇
(五)頼 山陽	五〇
(六)頼 聿庵	五五
(七)頼 支峰	五七
(八)頼 三樹	五七
●山陽門人	
○後藤松陰	六二
○牧 百峰	六二
○江木瀨水	六三

○細香女史	六三
○門田樸齋	六四
○兒玉旗山	六四
○藤井竹外	六四
○家長稻庵	六五
○宮原節庵	六五
○川上東山	六六
○森田節齋	六六
○岡田鴨里	六六
○村瀬藤城	六六
○村瀬太乙	六六
●彼崎氏一家	
(一)彼崎三島	七〇
(二)彼崎小竹	七二
(三)小竹門下四天王	七三
○彼崎竹陰○奥野小山○安藤秋里	
○橋本香坡	
●天保前後の諸儒	七六
○松崎懺堂○佐藤一齋○古賀洞庵	
○長野豊山○朝川善庵○齋藤竹堂	
○猪飼敬所○頼 山陽○梁川星巖	
○大鹽中齋○彼崎小竹○野田笛浦	
○坂井虎山○柴野碧海○帆足萬里	
○廣瀬淡窓	



●天保二大儒	
(一)佐藤一齋	八一
(二)松崎懺堂	八五
●説文二家	
(一)狩谷棧齋	八九
(二)山梨稻川	九〇
●安政前後の諸儒	九一
○藤森天山○林 鶴梁○安積良齋	
○藤澤東暖○大槻磐溪○藤田東湖	
○青山佩絃齋○松林飯山○佐久間	
象山○森田節齋○齋藤拙堂○土井	
啓牙○木下犀潭○草場佩川○池田	
●安政三博士	
(一)安井息軒	一〇〇
(二)鹽谷宕陰	一〇〇
(三)吉野金陵	一〇一
●藤森天山	一〇二
●梁川星巖	一〇六
○小野湖山○大沼枕山○遠山雲如	
○岡本黄石○鈴木松塘○江馬天江	
○森春濤	
○紅蘭女史	一二二
●水戸諸儒	

一 義公の修史	一一三
二 烈公の尊攘	一一六
○立原翠軒	一一八
○藤田幽谷	一一九
○川口長孺	一一九
○小宮山楓軒	一二〇
○青山拙齋	一二〇
○立原杏所	一二一
○豊田天功	一二二
○會澤正志	一二二
○武田耕雲齋	一二六
●水藩兩田	
(一)藤田東湖	一二六
(二)戸田蓬軒	一二九
目次畢	



近古書畫鑑定寶典

杉原夷山著

寛政三博士

(一) 儒學の諸派

徳川家康、既に兎梗を削平し、乾坤を廓清し、覇府を江戸に開くや、主として文教を以て國を治めんと欲し、藤原惺窩を延きて之を禮待し、又林羅山を擢んで、以て顧問に備ふ。是より崇文の風大に興り、鴻儒碩學、踵武相接し、嚮然として輩出す。修めて道德と爲し、發して文章と爲し、施して事業と爲し、與に俱に斯文を扶翼し、休隆を藻飾す。羅山の後、其子孫相繼ぎて幕府の儒官と爲り、以て天下の文教を掌る。而し



て其學問の宗とする所は、宋儒程朱にあり、抑も孔夫子の道末流派分し漢唐に至りて訓詁となり、宋に至りて程伊川、朱晦庵の格物窮理となり、明の世には王陽明致良知を唱ふ。其說宋の陸象山に原づく、故に世に之を陸王の學と曰ふ。清の世には考證學大に行はる。我國幕府の林氏程朱の學を宗とするの時、早くも寛永の頃、中江藤樹は陽明の學を喜び、山鹿素行は漢唐の古注を主とす。萬治寛文の頃、山崎闇齋は程朱の學に神道を加へ、稍後れて木下順庵は程朱を宗とすと雖古注を捨てず。其門人柳原篁洲は、訓詁は漢唐の註疏に據り、義理は宋明の諸家に取る。折衷學なるもの實に此に胎胚す。後細井平洲あり。片山兼山あり。井上金峨あり。金峨の門に龜田鵬齋あり。鵬齋と時を同じうして山本北山あり。豐島豊洲あり。又金峨の門に吉田篁墩あり。篁墩は考證一派の學を安永天明の間に唱ふ。

又闇齋の後、三十四年、貞享元録の頃、伊藤仁齋漢唐の古注を取り、古學を以て標榜し、其子東涯愈父の説を主張す、其學實永を経て正徳の末に至るまで大に世に行はれたり。又正徳享保の頃、荻生徂徠、明の李于麟、王元美の古文辭を喜びて之を唱ふ。門下選選傑士多く、延享寛延の頃、其學風一世を風靡す。夫れ既に儒家其宗とする所を異にするこゝと此の如し。而して門戸相濟し、同異を胸中に挟み、朋黨結構して漢唐と宋明とを論ぜず、仁齋と徂徠とを問はず、唯だ其己に同じきものを稱し、己に異なるものは排擠して顧みず、爭競是れ事とす。後進子弟殆ど其嚮ふ所を知らざる也。

(一) 松平定信の文武振肅

松平定信、天明七年を以て幕府の執政となり、侍從に任じ、特に將軍の輔佐を命ぜらるゝや、大に弊政を改革し、又學政の振興を圖り、同八年

●定信  
忘往事態  
心あてに見し  
夕顔の花散り  
てたつねぞま



よふたそがれのやど  
落葉  
風をば松の梢に残しおきて心静に散る木の葉かな  
千鳥の浦  
つどふ繪  
ひとかたに心さだめよきよ千鳥いづこの浦か波かぜはなき  
夕立  
池水にかすめる雨をなごりにてよそに過ぎ行く夕立の空

柴野栗山を徵し、翌寛政元年、岡田寒泉を徵し、三年、尾藤二州を擧げて儒官とし、學政を定め、意に天下の學者に、程朱學を奉ずるものにあらざれば、一切進むことを得ざらしむ。蓋定信等は以謂へらく、天下の公學を掌るものは、教も亦公を得ざるべからず。教の公なるものは程朱學を措きて他に求むべからず。則ち此學に依りて道德を一にし、趨向を一にし、以て風俗を正し、人材を養成せざるべからず。而して家康公以下歴世の意も亦皆然りと。諸儒心を協して異學を奉ずるものを排斥し、餘力を遺さず。當時の令文に曰く、  
朱學の儀は、慶長以來、御代代御信用の御事にて、既に其方代代、林氏右學風維持の事被仰付候儀に、候得ば無二油斷、正學相勵み、門人共取立可レ申管に候。然る所、近頃世上種種新規の説をなし、異學流行、風俗を破り候類有之、全く正學衰微の故に候哉、甚不相濟一事に

顔子  
夕顔のはかなき宿のうれひにも榮しむ道はかふることなし  
孔明餐  
草の戸を訪ひ來し月の影とめて露のこのみをつくしはてつゝ

候、其方門人共の内にも、右體學術不ニ純正者も、折節は有之様に相聞え、如何の事に候。此度聖堂御取締嚴重に被仰付候事に候へば、能く此旨申談し、急度門人共異學相禁し、猶又自關他門に限らず、正學致講究、人才取立候様、相心得可レ申事。  
蜀山人は狂歌の名手なり。當時歌うて曰く、  
世の中に蚊(斯)ほどうるさきものはなしぶんぶ(文武)というて晝も寝られず  
同五年大學頭林信敬卒するや、定信は岩村城主松平能登守乘繼の次子衡を擧げて其後を承けしむ、衡は述齋なり。述齋の出づるや、首として建言して新に國學を創し、造士の法を立て、其俊雋を擧げ、以て國家の用に充てんことを請ふ。允さる。往時昌平坂の聖堂、林氏の私學に屬す。此に至りて述齋地と堂とを併して之を納め、更に旨を承けて區域



●栗山  
月夜歩禁  
垣外閑情  
上苑西風送

(一) 柴野栗山

栗山、學博く經富み才識一世に絶つ。其文鎔鍊の至、渣滓俱に盡さ、涵養

を開拓し、聖廟を改營し、學堂諸寮を建て、寮上下を分ちて、以て官私の生員を増益し、司業を選び、屬吏を置く、規模宏大、制度森嚴、學政大に振ふ。

同八年、古賀精里を徵す、精里は諸氏と與に力を藝して、以て學政を振飾す、當時栗山、二洲、精里を呼びて三博士と曰ひ、又三助と曰ふ。三人皆其通稱にスケの字あるを以てなり。即ち栗山は彦輔、二洲は良佐、精里は彌助なり、或は精里を除きて寒泉を入る。寒泉通稱は清介、精里の辟されてより、出て、代官職と爲り治績あり、二洲曰く「寒泉理學名家。又善和歌。廣通國籍。又旁及三音律物産等技。莫不精究」と

桂香永明門  
外月如霜何  
人今夜常寧  
殿一曲霓裳  
奉御膳  
武内大臣  
五朝隆遇棟  
梁區鑾鏤三  
百六十春東  
略西征誰得  
敵千秋俎豆  
配應神  
境浦懷古  
黑以餐牛丹  
水乾六龍西  
幸海漫漫登  
櫻滿地當時  
恨獨有陶真  
曲裡彈  
太公釣渭  
漁翁忽爾驚

の深き、矜慘盡く化す。壯快俊逸、光彩陸離、筆鋒敵なし。詩は意を留めず。然れども往往名作あり、其書太だ巧みならずと雖、筆勢頗る雄勁なり。索むるもの門に踵ぐ。子なし。弟貞毅の二子を養うて嗣と爲す。一を允升と曰ひ阿波に仕へ。二を允常と曰ひ幕府に仕ふ。

柴野 碧海

碧海、名は允升、字は應登、碧海は其號、阿波侯に仕へて儒員たり。専ら經義を攻む。緒餘文を能くす。詩は作ること罕なり。天保六年七月十六日歿す年六十三。

〔當世名家評判記天保六〕

極上々吉

柴野平次郎

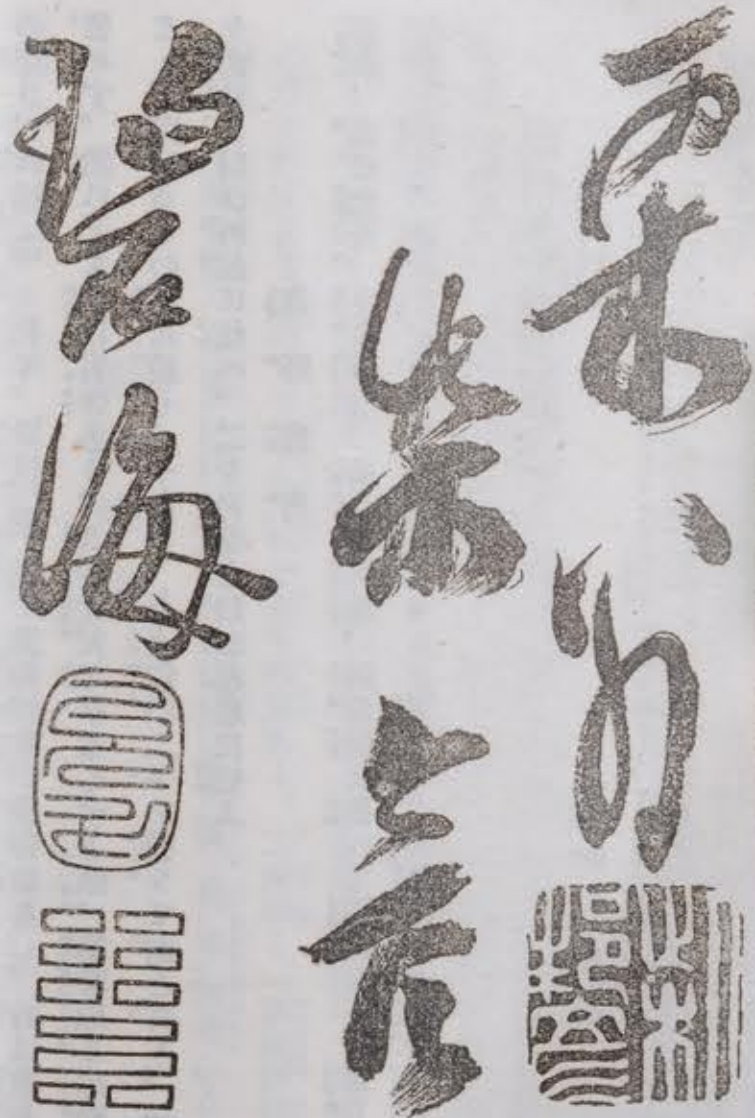
頭取  
先生は栗山先生の長子でござります見物知れた事く。それはいはずとも評判はいか

し頭取學問は家學の手強き、性理文章詩書ともに三絶でござります。惜哉寡聞困陋の識は免れせん。



揚牧野風不  
有周王微古  
卜消微復  
認非熊  
神武殿  
遺陵才向里  
民求半死孤  
松數畝丘非  
有聖神開帝  
統離教品庶  
脫夷流殿王  
像設專金閣  
藤相墳榮層  
玉像百代本  
支離不億幾  
人來此一回  
頭

●碧海  
題李白圖  
放歌宮錦謫  
仙才磊落豪  
情三百杯一  
事只留千載



菊池五山曰く、

詩人無學。學人無詩。是今時通病。余讀柴碧海枕上集。特性其不然。如五言云。江水多於地。青山欲到門。野徑垂楊外。人家亂水間。蹊迴方學斗。潭轉欲成輪。七言云。風前林影藻荇動。露下蟲聲絡繹愁。真源在在無非水。覺路頭頭總是山。七十平分仍故我。尋常負債又今春。諸句極有風味。不似平時勃率談理。書法妙ならず。然れども品位自ら高し。蓋胸中の書卷の氣之を致す也。遺墨の尙存するもの少し。人價を貴うして之を購ひ以て愛玩す。

(二) 尾藤二洲

二洲、學問純正。専ら程朱を純守す。文は歸震川を愛し、氣格高淡なり。

恨。匡山頭白  
不歸來。  
丁亥歸家  
歸來依舊臥  
茅堂。松月江  
風也自涼憶  
得去年三伏  
日。滿窓無處  
避斜陽。



詩は陶柳を愛す。老に及びて白傳を喜ぶ。著す所稱謂私言あり。幕府の盛時に在りて、尊王の大義を明にす。其識見三博士中に卓出すと謂ふべし。幕相某曾て儒士を岡田寒泉に問ふ。寒泉對へて曰く「文辯雄豪は、中井竹山に若くは無く、學識純粹は尾藤二洲を最と爲す」と。其書圓暢清勁、綽として風韻あり。最も喜ぶべきもの、其人品乃ち爾焉耳。子に水竹あり。

三河



(三) 古賀精里

●精里  
三傑贊  
震動天地豈  
爲身謀世臣

精里、學術程朱を尊信すること神明の如く、常に仁齋、徂徠の學風、一世

に賛鼓するを歎じ、諄諄として門生の爲めに、學術の是非邪正を指示す。天下翕然、程朱の學に歸往するもの、精里與つて最も力あり。夙に文詩を好む。文は高古俊潔。詩は雋永清爽、晚に及び、晩唐を出で、宋に及ぶ。詩文の外、又書法を喜び、夙に意を趙松雪に刻し、後米南宮、董玄宰諸家を參用し、以て晋唐に遡る。妍秀雅健一時に冠たり。來り乞ふもの、屢常に戸外に滿つ。文化十四年五月三日歿す。年六十八。

精里 長子 穀堂

次子 焯 佐賀藩に仕ふ  
季子 侗 庵 子 茶溪

古賀穀堂

名は壽、字は溥卿、藤馬と稱す。業を父に受け、佐賀に歸りて、藩校の教諭と爲る、後世子の傳に轉じ、江戸邸に住む。輔養すること十三年、

義重報韓之  
仇。乘機而行。  
飯項與劉。不  
愆。子素與赤  
松游。藏用退  
步。休業執職。  
始如處女。貌  
乃可求。張良  
肅何  
龍飛赤霄。風  
雲摩盪。乃筆  
文吏。化爲將  
相。切務推收。  
亡寄。調兵  
轉。隨。如。水。有  
源。隨。淵。隨。漢  
三。用。規。戒。銷  
釋。猜。訪。發。縱  
先。賞。泣。榮。無  
量。蕭。何  
忍。市。人。辱。驅  
市。人。戰。此。在



兵法神化鬼  
變馬使奉兵  
智味先見解  
推衣食侍謂  
龍脊君夫鈴  
翰由此其選  
多多益辦分  
數明續登境  
數語備見針  
錦(錦信)

●教堂

豐公按摩圖  
本是猿面藤  
吉郎按肩摩  
足智避強雲  
龍變化須更  
裏一鼓大兵  
擢北莊  
秋懷  
西肥城郭古  
諸侯滿目人  
煙接地浮榮  
海潮聲高永

既にして老を告ぐ。世子立つや、年寄相談役と爲り、番頭に遷り、年寄役に轉ず。食祿五百石、侯の信委益篤し。天保六年、侯に従つて江戸に之き、病に罹る。明年九月漸く篤し。十六日、遂に起たず。年五十九。學洛閭を確信し、博く史乘に渉る。文は秦漢を祖とし、歐蘇を宗とす。才思絶敏、千言萬語立に成る。書は巧みならず。

古賀 伺庵

伺庵、名は煜、字は季曄、小太郎と稱す。業を父に受け、昌平學の教授たり。學程朱を奉じ、尤も文を屬くるを好み、壯歲八家に由りて手を下し、流暢爽朗、自在を主とす。暮年雄宕雅潔、險峭の作あり。詩は杜少陵に尸祝し、甚だ推敬せず、天真爛漫たり。書法は甫め諸家を臨摸し、遒勁にして態度あり、晩に王右軍の曹娥帖を確守し、交ふるに自分の機軸を以てす。蒼老勁拔、神韻流露、深く當時輕浮の書を厭ひ、端に之を

夜天山雪色  
入深秋白沙  
衰草行臨野  
落日涼風獨  
倚樓十歲龍  
鐘書劍客追  
懷往事不勝  
愁

同

化外群邦限  
海濤崎陽山  
勢自周遭狼  
煙直上塞雲  
折衝歸魯船  
邊月高新有  
折衝歸魯船  
時開作賦接  
吳騷潘翰殊  
鎮堪深喜更  
使神機合略  
●伺庵  
朱文公贊

古に復す。曾て論書二十絶を賦して、以て胸臆を抒ぶ。病來結架意の如くならず。細書更に瑟縮す。故に壁窠大字を作る。痛み甚しければ、則ち輟め、且つ輟め且つ書す。書名已に騰り、需索むるもの踵を接す。而かも揮灑累幅、未だ曾て勞を告げず。又未だ曾て謝を竟めずといふ。弘化四年正月晦歿す。年六十。

栗本勉庵曰く「伺庵先生は寛厚溫藉の人、終に其疾言遽色を見たるもの無し。精里翁が容貌壯大雄偉なりしは、顧杏坪が詩抄に、詩人目するに萬斛牛を以てすとあるを見ても知るに足るが、伺庵先生も、遂に尋常に優りて偉大なりき。伴宮の建築は、所謂京間尺なれば、尋常家屋に比すれば、柱檼の廣高二寸強なるも、先生其内に來るを見れば、頂常に其幅居を摩せり。今猶ほ記す。一年元日、新正を賀せんとて學生三十人許、續續として先生の齋前を過ぎ、玄關に至らんとしたるに、雪後泥濘に會し、彷徨顧慮するの隙、忽ち一人木履の儘、廊上に飛び上りて過ぐるを見て、衆皆其計を得たるを羨み、残らず舉りて躍上し、泥痕狼藉のまゝ、羣羣と先生易書講義の語氣を擬し、此の如き場合には、變通せざるを得ずと口強みながら經過し、不圖隙隙を窺へば、先生端座莞爾として居られしに、一同深く恐怖し、匆匆に却き走り去りしが、後絶えて



人中之龍。天  
鐘精英。學紹  
往聖。藝慈群  
生。力踐深詣。  
矩方準平。尼  
山以降。再見  
集成。泰山氣  
象。朗月襟胸。  
關明。盡道如  
日再中。甘棠  
之政。折檻之  
忠。一代人杰。  
千秋儒宗。

精里精里  
古賀煜  
對煜  
古賀煜  
系信大賀煜海

一語の讀も蒙らざるのみならず、翌年より必らず其徑路に敗落炭也を厚く敷きて、泥汗を避  
けしめ、以て例とせられたるを見ても、其寛量を知るに足れり。願ふに精里翁の殿に懲りて、  
深く之を矯められたるなりと暗する人も有りき。

古賀茶溪

茶溪は侗庵の子、名は増、字は如川、謹一郎と稱す。一に謹堂と號す。  
晩に専ら茶溪を以て行はる。業を父に受け、學漢洋に通ず、幕府に事へ  
て留守居番となり、昌平學事を兼知す。元治元年大阪町奉行に遷る。病  
を以て任に赴かずして罷む。慶應三年目付に轉じ筑後守に拜す。明治十  
七年甲辰十月三十一日歿す。年六十九。

寛政五鬼

幕府既に程朱學を以て正學と爲し、他は之を目して異學と稱す。而かも



其所謂異學なるものは天下に瀾漫し、根柢極めて深く、牢として抜く可からず。或は古學を喜び、或は古文辭を奉じ、或は陽明學を宗とし、或は折衷學を唱ひ、諸儒各壇拈旗幟を樹て相持して下らず。都下書生其教に薰染すること久し。故に幕府の示諭下る毎に、相傳聞して、詆謗百出。最も各を栗山に歸し、甚だしきは、則ち戈を携へて其家に入るものあり。備中の西山拙齋は、學程朱を崇び、異を闢き道を衛るを以て任となす。書を栗山に寄せて學必ず程朱を宗び、以て異學を禁せんことを勸む。赤松滄洲之を開き、書を寄せて以て之を偏とす。栗山答へず。拙齋爲めに書を著して之を辨ず、名づけて論學書と曰ふ。其互に正異を辨じて、紛紛相容れざること此の如し。藝州の賴春水、大阪の中山竹山兄弟遙に栗山、二洲と聲氣相應ず。

時に山本北山、龜田鵬齋は、伊藤藍田、豐島豐洲、市川鶴鳴、塚田大

峰、戸崎淡園等と與に終始其學ぶ所を改めず。世、藍田、豐洲、鶴鳴、大峰、淡園の五士を呼びて寛政の五鬼と曰ふ。五鬼或は北山、鵬齋、鶴鳴、豐洲、大峰を稱す。官學派は之を下町儒者と譏る。下町とは儒官等が皆山の手に住せるに對して名づけたる也。五鬼の徒屈せず、力を奮うて之に抗す。北山、鵬齋の二人は、最も幕府の憚る所と爲る。又京都には皆川洪園、岩垣龍溪、村瀬栲亭、佐野山陰あり、共に古學を唱ふ。世之を關西古學四大家と稱す。九州に於ては、龜井南冥あり。物徂徠を慕ひて復古學を奉ず。五鬼以後江戸には太田錦城あり。考證學を唱ふ。

### (二) 伊東蘭田

●藍田  
秋來  
秋來湖海客  
愁緒亂如蓬  
浪跡升沈外  
微名憎愛中

藍田、伊東氏、名は龜年、字も亦龜年、藍田は其號、金藏と稱す。初め萩生金谷に師事し、後大内熊耳に従ひ、其業を切磋す。同門中根君美と共に



遊人從辭性  
矯首望冥鴻  
富貴非吾好  
浮雲滿碧空  
何物生來意  
寄游天地間  
煙霞過白日  
歌笑老紅顏  
儒服聊寄傲  
貧居好愛閑  
祇應安所遇  
不必買青山

才名あり。君美は覺藏と稱す。故に時の人餘家の二藏と謂ふ。熊耳餘氏を稱すればなり。學、徂徠を奉ず、名薦紳の間に起り、諸侯、益を請ふもの多し。門下秀才彬彬輩出す。文化六年己巳四月二日歿す。年七十五。

(二) 豐島 豐洲

豐洲、豐島氏、初め中岡氏、名は幹、字は子卿、周吉と稱す、豐洲は其號、又考亭と號し、塾名を由己堂と曰ふ。江戸の人、初め宇佐美滿水に學び、澤田東江に従ひ、折衷學を奉ず。豐洲山縣大貳と友たり。日夕往來、經義を研鑽す。大貳の勤王を唱へ、幕府に捕はれて刑に處せらるゝや、豐洲嫌疑を受け、家に銅せらる。時に明和四年なり。是より中岡氏を改めて豐島氏と稱す。後禁解け帷を火番坊に下して徒に授く。文化十一年甲戌十一月七日歿す。年七十八。

(三) 市川 鶴鳴

鶴鳴、名は匡、字は子人、姓は源、市川氏、高崎藩士なり。大内熊耳に學びて徂徠を奉ず。西京、信州、尾州、浪華に遊び徒に教授す。晩に本藩世子の侍讀となる。寛政七年乙卯夏七月八日歿す。年五十六。

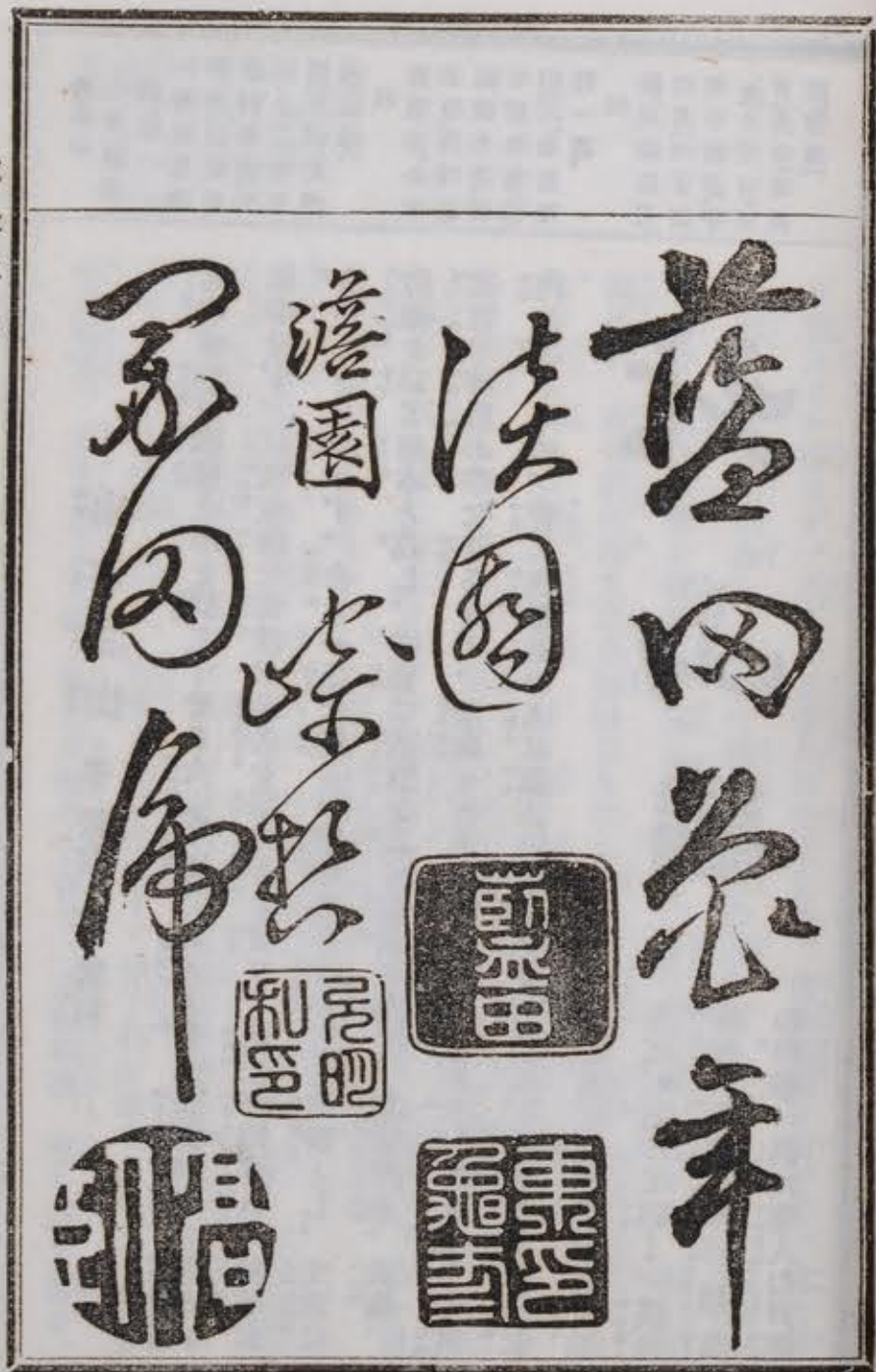
(四) 塚田 大峰

大峰、名は虎、字は叙、多門と稱す。信州の人、淨土宗の僧にして江戸増上寺の學寮に居る。還俗して儒となり、徒を集めて學を授く。其說程朱に拘らず。後細井平洲の薦めを以て尾州侯に仕ふ。天保三年三月二十一日歿す。名古屋城南大光院に葬る。



(五) 戸崎 淡園

淡園、姓は源、戸崎氏、名は允明、字は哲夫、初名は哲、字は子明、後今名に改む。淡園は其號、常陸の人、父を命英と曰ふ。守山侯に仕へて郡屬吏となる。淡園を常陸松川に生む。淡園年十八、歩兵隊となる。業を藩儒平野金華に受けて徂徠學を主とす。世子簡公の傳となる。簡公の封を襲ぐや、累遷して亞太夫となり、寛政戊午上大夫に拜せらる。老いて致仕し更に淨巖と稱す。四世に歷仕する凡そ六十餘年、敗事ある無し。文化三年丙寅冬十一月十四日歿す。年八十三。淡園初め家貧なり。心を榮利に嬰れず。詩を賦し文を屬して以て樂しむと爲す。且つ書を能くす。人と爲り性急なり。而れども謹抑して已に克つ、其家に在る、奴婢未だ嘗て惡聲を出さず。溫厚物に接する皆是類なりといふ。





●北山  
今戸新居

一面面松濤  
翠浪幾畦畦  
翠稻青蒿田  
家生計積多  
事肩頗腰鐵  
揆枯槁  
同  
蕉葉抽心青  
玉鞭開時滿  
幅翠光雋新  
居僻地無明  
綢試筆墨陀  
詩一聯  
同  
繞屋綠陰侵  
砌苔珠芽新  
埋小樓臺穿  
窓多要容明  
月先有涼風  
透竹來

山本北山 子綠陰 孫箕山

北山

北山は龜田鵬齋と時を同じくせる大儒也。其人と爲り豪邁卓絶、矯強人に屈せず。抗慨氣節を尙び、功名を以て自ら許す。故に學問亦人の籬下に立つことを欲せず。自ら一格を構ふ。經學は孝經を以て根據とし、文章は韓柳を以て標本と爲し。詩藻は清新を以て宗派と爲す。博覽旁通、兵機、天官、曆象の學に至るまで、兼該せざるはなし。四方の士、風を聞きて其門に入るもの、常に無慮數百人に及ぶ。其經學を講じて、發明自得の處に至れば、肩を揚げ案を拍ちて、言つて曰く、漢唐守株の腐儒、宋明捕風の理學、俱に聖人の戸庭

●綠陰

春雨  
日落雨師無  
賴甚聲聲妨  
睡滿簷牙今  
宵縱是損梅  
蕊應有明朝  
賣杏花

山本北山 綠陰 箕山

を窺ふこと能はず。況んや其堂奥に於てをや。余其範圍を出て、別に得る所あるもの此の如し。而して後真に聖人の道を謂ふべきなりと。又經濟を説き、或は兵機を談じて、其自ら信じ、自ら喜ぶ處に至れば、則ち議論爽快、身其所に居て之を治むるもの、如し。平生の説話と雖、其軒舉自負の處に到れば則ち必ず臂を攘ち腕を抱して以て其精采を見はし、聽者をして帖服せしむ。平生諸を重んじ、古俠客の風あり。曾て自ら儒中の俠と稱し、即ち以て印文と爲す。其書巧ならず。故に多く揮毫せず。是を以て遺墨の尙存するもの少し。好事家價を貴くして之を索む。  
北山一男あり。名は謹、字は公行、綠陰と號し、一に茶佛と號す。通稱亮助。北山嘗て金杉村千束祠に住し、竹堤吟社を結ぶ。綠陰亦茶寮を構ひて居、扁して綠陰と曰ふ。吟友と詩酒歡娛す。後下谷に徙るといふ。其子名は信陽、字は景年、箕山と號し又學半と號す。通稱額藏、儒を以て顯る。



●鶴齋  
 蓬萊會侍群  
 仙宴醉歸金  
 母怒加我嚴  
 譴謫降塵世  
 作狂夫  
 偶然走筆  
 身在塵中不  
 識塵中事  
 塵始知塵纔  
 隔未認塵時  
 不是塵  
 春曉  
 淺茅原上雨  
 殘花斑女廟  
 前草接空杜  
 宇聲聲啼不  
 歇鏡池一面  
 落花風

龜田鵬齋子綾瀨孫鶯谷  
 龜田鵬齋は豪邁偉拔、博大の學、浩瀚の才を抱きて志を時に得ず、金杉に  
 隱處し、麴藥に放浪し、窮困以て一生を終はる。悲しむべきかな。其文詩  
 矯矯昂昂、驥足に鞭ちて平原を縱獵するが如し、詩は蓋し之を假りて、其  
 鬱律潏潏の氣を吐出し、以て一時の快を取るのみ。彼字を練り句を鍛へ、  
 以て心肝を嘔くものゝ、敢て望む所に非ざるなり。同時詩佛、五山の徒あ  
 り、鵬齋其巧緻剪裁は、則ち此二人に及ばずといへども、其氣魄雄大に至  
 つては迥然これに勝る。  
 書は年甫めて六歳、初めて三井親和に學ぶ、親和之を稱して曰く、此兒筆  
 勢俊異、後必ず大名を成さんと。後刻苦して書法の奥旨を極む。楷は歐柳よ  
 り出づ。故に筆法圭角多し。草は圓暢洒脫全く之に反す。徳川氏三百年間

●鶴齋  
 蓬萊會侍群  
 仙宴醉歸金  
 母怒加我嚴  
 譴謫降塵世  
 作狂夫  
 偶然走筆  
 身在塵中不  
 識塵中事  
 塵始知塵纔  
 隔未認塵時  
 不是塵  
 春曉  
 淺茅原上雨  
 殘花斑女廟  
 前草接空杜  
 宇聲聲啼不  
 歇鏡池一面  
 落花風

罕に觀る所なり。又畫山水を作る。筆墨鉛丹の間に規規たらず。林石平  
 遠、朝市塵埃の氣なし。  
 自題畫  
 木犀時節雨方頑。獨讀好書深鎖關。午後眠來懶搜句。  
 排窓自寫米家山。  
 峰腰路斷白雲橫。流水源頭水有聲。老屋門前繫船處。  
 滿江楓葉夕陽明。  
 東南盡水西北山。山外蒼湖水上山。怪山怪水無尺地。  
 山侵湖水水乾山。  
 疊鏤奮衣踏石磔穿雲。排棘倚屏顏似商。明日爲遊處。  
 指點青山赤嶂間。  
 內浦外灣紅寥落。大江小汊白蘋洲。天外餘霞未全歛。



信濃縣  
只野  
只野  
只野

獨釣 寒江落日秋。

獨釣書法の門人に、野呂陶齋あり。師歿後其書を贋作す。名家評判記に

上上吉

野呂省吾 名省、字省吾、號陶齋

# 陶齋省吾書

水の仕込、大分學問が上手づよござるそうな。

龜田綾瀬

陶齋の子、綾瀬、名は長梓、字は木王、通稱三藏、溫厚君子の風あり。關宿侯の儒員となる。豊風父に肖たり。嘉永六年癸丑四月十四日歿す。年七十六。

も、自分の書は却て出来ぬが残念く  
ヒイキ 御子息も秋

陶齋省吾書  
龜田興敬讚  
餐谷



●鶯谷

江東漫吟  
閑堂點檢舊  
書堆自悔下  
帷面上埃數  
畝荒園何所  
有亦詩松菊  
入詩來  
幽亭非野又  
非市園樹  
霜鳴不已計  
短過名將奈  
何紅塵縹隔  
一池水

●錦城

菅公  
寬平相業見  
雄才晚節浮  
雲何足開却  
教神德照悠  
久千樹長松  
一樹梅

〔名家評判記〕 切上 上吉  
〔頭取〕 祖父より學問が手がたくて、風流温雅、眞の儒者でござりますすそれゆゑに本たうにしんふくする人が多くござりますす「ヒイキ」そうじゃん「リルロ」女房に誤るものはどうだ「ヒイキ」それはそれ手蹟も老先生の標でござりますす。

〔名家評判記〕 切上 上吉  
〔頭取〕 祖父より學問が手がたくて、風流温雅、眞の儒者でござりますすそれゆゑに本たうにしんふくする人が多くござりますす「ヒイキ」そうじゃん「リルロ」女房に誤るものはどうだ「ヒイキ」それはそれ手蹟も老先生の標でござりますす。

太田 錦城

經術折衷を主とするもの、細井平洲、片山兼山、井上金峨等あり。金峨の門秀才多し。所謂金峨門十三家には、尾崎稱齋、蓋鳩陵、梅澤西郊、原狂齋、篠本竹堂、岡四溪

楠公談兒圖  
父子談離機  
井東一編遺  
壽見精忠南  
朝五十年皇  
祚都頼君家  
再造功

林君復  
平湖萬頃浸  
雲根千樹梅  
花一草軒雙  
鶴相迎小船  
返水清淺處  
月黃昏

小松内府諫  
大相國圖  
衣冠閑雅甲  
兵中反覆言  
論感乃爲天  
假斯公數年  
壽諸源爭得  
嘯秋風  
陶淵明

澤箕山  
菊池南陽  
吉田篁墩  
劉桂山  
下田芳澤  
菅東海

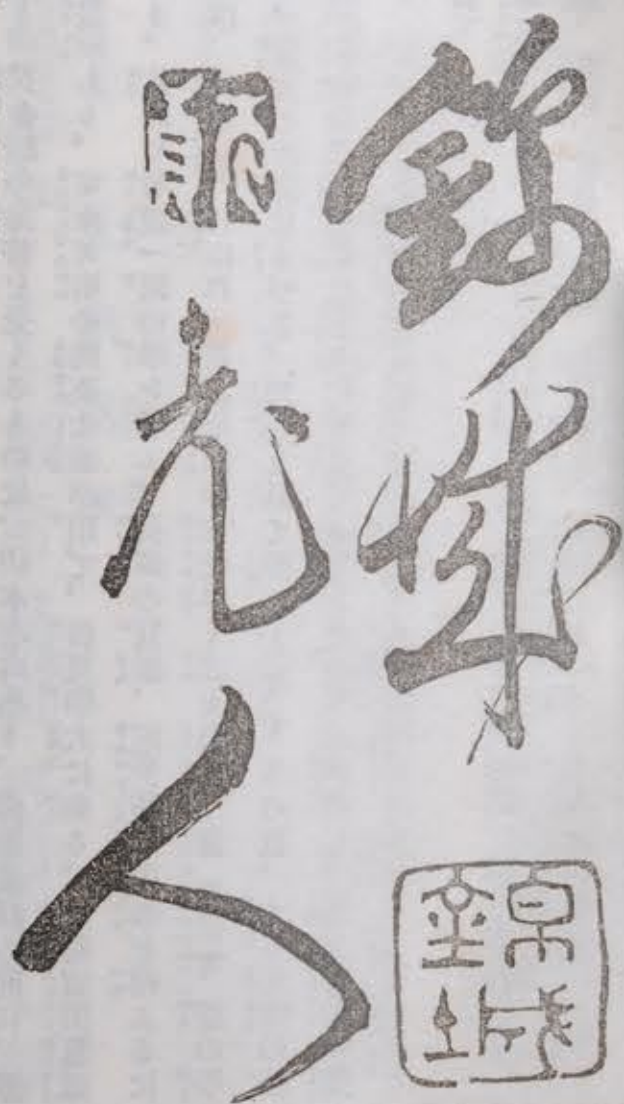
龜田鵬齋

あり。又金峨の誨督を受くるものに、山本北山あり。澤田東江の門に、豊島豊洲あり。安永天明の間英士並び出で、折衷學大に興る。此時吉田篁墩あり。始めて考證一派の學を唱ふ。長崎の賈舶、近世清人の書を傳ふるに及び、此學益行はれ、折衷學派の末流多く之を喜ぶ。蓋清世考證の學は、漢唐の注疏に本づき。精密を以て勝るとなすもの也。尤も宋明の性理を排撃す。是を以て程朱を偏主する者日を逐うて凋謝し、寛政異學の禁も、忽ちにして行はれざるに至る。而して其考證學派の巨擘を太田錦城と爲す。

錦城學問淵博、諸子百家の書讀まざる所なし。尤も經術に長ず。詩、書、易、春秋、沈潜、反覆、參互錯綜、考證の妙、多く先賢未だ發せざる所を



王謝堂前橘  
李春陶家五  
柳自無麻吐  
將心事附松  
菊千古清風  
有此人



發す。上先秦古文より、下後世の雜書に至るまで、苟も經義に關するものあれば、旁引曲暢、其同異を審にし、其是非を辨ぜざるなし、其漢唐宋

明及び近時清人と我邦諸儒との説に於ては、會釋演繹、以て其衷を折り、竟に自ら一家を立つ、又老釋の書、占相の説の如きに至りても、亦皆粗ぼ其歸趣を究む。書法惜むらくは巧ならず。

### 江戸詩學四大家

#### (一) 偽唐詩の排撃

明の李于鱗、王元美、字字唐人に擬し、句句唐人に同じうす。自ら以爲らく、唐の正鵠を得たりと。漫に支離散渙不了の語を作り、陸梁誇詡、氣勢を張り、以て大に人を欺く。其唐に得る所のものは、獨り結構字句の間のみ。神韻風情に至つては毫も之あらず。我邦の荻生徂徠其形似に眩し、稱して唐後の一人と爲し、其偽唐詩の風を唱ひ、廻ち偽唐詩選を奉じて、于鱗が金科玉條と爲し、後學を撫弄す、門下の秀才には太宰春



臺、服部南郭、山縣周南、平野金華等あり。南郭最も詩に長じ、兩岸秋風下二洲の一絶の如き、今尙人口に膾炙せり。即ち盛唐を唱道すと曰ふと雖も、實は李王を學びたるもの也。唐詩は全く明詩なり、一時海内流傳風を成し、徒に文字に拘泥して、其神味に參透せず。故に格調は膚廓に流れ、工夫は剽竊に失し、詩道遂に壞れたり。

(二) 宋詩の鼓吹

此時に當りて浪華の葛子琴實際を主として之を一變し、京都の僧六如亦之を二變す。江戸には山本北山豪邁矯強の資を以て、口を極めて痛く祖徠の派を駁し、袁中郎性靈の説を唱へて、大に藝園の耳目を驚かす。其徒自ら其非を知りて舊習を脱し、遂に宋詩を尙ぶ。蓋袁中郎性靈の説は宋詩の結構にして、偏に格調を字句の間に求むる李王一派の文辭とは、大に面目を異にす。然り而して北山の詩才は之に伴はざるを憾むのみ。

適市河寛齋、赤江湖社を結びて、更に宋詩を標榜し、性靈を貴び、清新流麗を以て後學を提撕す。柏木如亭、大窪詩佛、菊池五山之が羽翼たり、諸家互に詠物竹枝を以て新奇を競ふ。海内の詩人靡然として宋詩に嚮ひ、擬唐詩の雲霧一掃、蕩滌殆ど盡きたるものは、實に江湖社諸子の力なり。北山の痛駁は、他人の爲に嫁装を製せしが如きもの非耶。

(二) 市河寛齋

市河寛齋、少うして學を林氏の門に問ひ、又關松窓に師事す。後松窓の薦を以て、昌平學員長となる。居ること五年、後病を以て謝し去る。寛政三年、富山侯徴して養舎の教授となす。職に在ること二十餘年、文化八年に至りて、老を以て仕を致す。學問該博、最も詩に精しく、篇數頗る富み、精麗奇峭あらざる所なし。其初め杜樊川たり、一變して白樂天、再變して

●寛齋  
東坡赤壁  
孤舟月上水  
雲長崖樹秋  
寒古戰場一  
自風流屬坡  
老功名不復  
畫周郎  
寒雲斷續月  
如弓蕭殺孤  
村未睡中近  
有後山狼乳  
子一聲震地  
五更風  
水郭初夏







●時佛

寒食自今無  
幾日梅花零  
落杏花開春  
寒無力不  
足却向黃昏  
作雨來  
晚步  
閑底扶筇步  
曉對春風輕  
軟弄巾紗細  
軟何事太早  
計密網先絨  
欲發花  
殷勤迎客剪  
畦蔬醇朴深  
如太古初唯  
恨漁翁沒文  
字不求秦火  
以前書  
世間無限事  
紛紛耳冷如

(三) 大窪詩佛

大窪詩佛、初め北山に學ぶ。又寛齋の江湖社に入りて宋詩を鼓吹す。後神田玉ヶ池に卜居す。堂に杜少陵の像を安んじ、詩聖を以て稱となす。其自ら詩佛と號するものは、蓋張南湖が老杜は詩中の佛の語に取る也。性樂易酒を嗜む。細事に拘泥せず。語音鑑の如し。家には食客、塾生男女十餘人料理番あり。驢客酒人の來り訪ふ者絶えず。歌妓も亦日として來らざるなし。其詩會の日には、岡本花亭、大沼竹溪、菊池五山、朝川善庵、宮澤雲山、館柳灣、鹽田隨齋、山地焦窓、池守秋水、畫人依田竹谷、喜多武清も亦來り會す。詩佛毎に八百膳の料理を以て之を饗すといふ。奢侈想ふべし。其詩境頗る超逸、行雲流水の趣あり。詠物を得意とす。然れども往往纖巧に失するものあり。書法は蓋し虞世南を學ぶもの也。最も草體に長じ

今百厭閑。莫笑懶慵。蘇學士總將家政付朝雲。  
墨菊  
典午園陵無一杯。離花不復舊時秋。堪噉黃綺出山去。陶令歸來猶黑頭。

●五山

薄暮逢雨  
雨多雷鼓奏  
香多坐倚涼  
細喚奈何生  
皂雲帷俄然  
掩義和縫下  
進歸鏡  
宿山村  
四山堆雪玉  
玲瓏月落荒  
村夜色空燈  
火隔溪紅一

(四) 菊池五山

菊池五山、詩名を詩佛と齊しうせる人なり。其著五山堂詩話大に世に行はる。其五山と號するものは、余貧にして書を貯ふること能はず。偶購ひ得るも、早く已に羽化し去り、篋中に集五部を留む。一は白香山、一は李義山、一は王半山、一は曾半山、一は元遺山、此を外にして有ることなし。因りて五山を以て堂に名く。句あり云ふ。家徒四壁立。書僅五山存すと。其詩詠物竹枝を得意とす。書拙し。五山の五の字、頭の一畫太し。書畫商估、



書畫鑑定寶典

三八

「名家評判記」

菊池左太夫  
名桐孫、字無絃、號五山

ワ  
ル

新晴墨田  
堤看花花  
已摧殘  
寒食清明風  
雨頻多情空  
爲惜青春長  
堤十里新晴  
了望底幾花

文化文政前後、江戸四大家、宋元清新の詩を唱へて、徂徠南郭の末流が奉ずる所の僞唐詩を排撃するや、海内の詩人靡然として宋詩に嚮ふ。菊池五

葛西因是

三九



產見人。  
牧牛圖  
哥南畝  
星野姐  
燈不機  
銀霞道  
類養得  
如許肥

山は楊誠齋を喜ぶものなり。曾て曰く「山本北山先生、昌言して、世の偽唐詩を排撃す。雲霧一掃、蕩滌殆ど盡く、都鄙の才子、翕然として宋詩に嚮ふを知る。其功偉なり。余先生に謂つて曰く、偽唐詩已に塵にす。更に偽宋詩あり。又一素を生ずと謂ふべし何如と。先生莞然たり」と。蓋自ら宋詩の弊を知る也。而も亦其弊に陥り、纖巧に流れ、淺俗に趣き、遂に偽宋詩と爲る。彼偽唐詩の徒に文字に拘りて、神髓を會せざるものと趣異にして、病は則ち一なり。此時に當りて、別に一旗幟を翻し、唐詩を鼓吹するものあり。葛西因是の如き其一人なり、因是名は實、字は休文、通稱健藏、因是道人は其號、大阪の人、學を平澤旭山に受く。業成りて江戸に講説す。心を文詩の格法に潜め、發明する所ありて、後生文字を商量する者の爲に圭臬を貽す。大要金聖嘆の法に本づき、而して間出入するものあり。其詩唐を尙び、徒を集めて類に唐律を講ず。太田錦城曰く「因是の才學文章、

一時の英雋、其文雅俗を辨せず。是れ其短とする所、然りと雖も、其才氣は則ち遠く時輩に超出す。今代の文人當に此子及佐藤一齋を以て冠冕と爲すべし」と。皆川洪園亦京師に在りて唐詩を唱ふ。

因是

十時梅屋

儒人の學に達きものは、詩に拙に、詩に巧みなるものは、書を能くせず。



書に妙なるものは、畫を善くせず。蓋し人の才は限りあるを以てなり。徳川氏の三百年間、鴻儒碩學多しと雖も、而かも詩書畫を兼ね能くするものは獨り十時梅屋のみ。

梅屋、儒を以て伊勢長島侯増山雪齋に仕へ、國學の文禮書院に祭酒たり。後浪華に家居す。性跌宕酒色を戒しめず、其詩に於ける構思を費さず、筆を執つて立るに成る。雋永高雅喜ぶべし。歿後遺稿散落して世に存せず。後人其太牢の味に飽き難し。爰に數首を録して、讀者に一嚮を嘗めしむ。

山村秋夕

三兩茅茨接疎林。返照收牛羊。何處下蕭索。暮山秋哭富有朋。

歸潛江天恍弔君。想見冀北昔空群。隨身共逝劉伶跡。焚稿纔留杜牧文。花落臘風梅入笛。曲終郢調雪埋墳。

時賜稿

梅屋





綈袍易灑山陽淚。戀態人間總白雲。

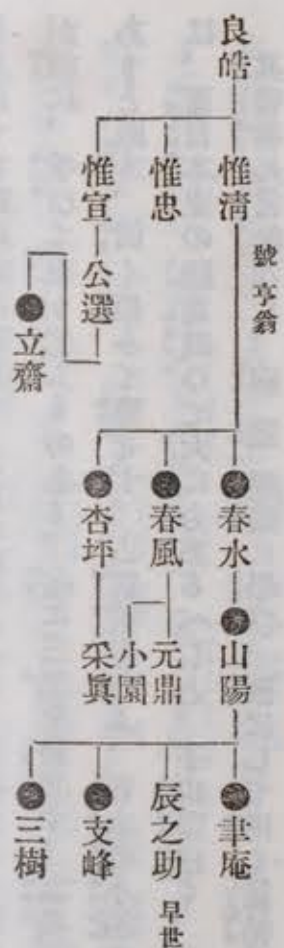
和南伯寧病中

他鄉書劍老。病裡掩柴關。屢中賢人酒。飽看仁者山。落花春畫永。樓鳥夕陽閑。須候清知好。輕船縱往還。

秋日江行

斜日收殘雨。孤帆挂落霞。城頭開戍角。江口見人家。衰髯驚秋葉。歸心逐暮鴉。今宵何處泊。棹月入蘆花。其書奇古縱逸。姿媚之意態なし。其畫山水。遠く沈啓南を宗とす。筆力遒勁。書卷の氣。縑素の間に充溢す。眞に文人情を翰墨に娛ましめ、自ら遊び自ら止まり、矩度の爲めに拘はるものにあらずる也。其遺墨の價貴きは豈獨り儒を以ての故のみならんや。

賴氏一門



(一) 賴春水妻梅颺

●春水 牡丹  
錦輝彫欄豪  
富家李唐當  
日盤粉華東  
方別有櫻花  
在宋許崇儀  
王百花

春水は藝藩の儒員にして、世子の伴讀たり。其友柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里、幕府の儒官となりて江戸にあり。春水、中井竹山、西山拙齋諸子と聲氣相應ず。世人の稍程朱學に向ふものは、春水與つて力あり。文詩典質雅馴、晩に益之を嗜み、良辰美景、輒ち子弟を集め、酒を命じ韻を圖



にし、或は策を杖いて遊歩し、必ず篇詠あり。其書俊逸過邁、蓋し之を天稟に得たり。少き時、堺浦に至り趙陶齋に逢ふ。陶齋書を善くするを以て著る。其人と爲り、傲岸にして一世を可とせず。一び春水を見て之を奇とし、意を傾けて之に教ふ。後大阪に抵り徒を集めて學を授くるや、又筆札の妙を以て稱せらる。殊に小楷に妙なり。其大坂に在る時桂玉辛艱を極む是を以て書肆の索に應じて、大日本史を手寫す。其捷速して筆法甚だ美なるが故に、争ひて來り乞ふものあり。遂に三部を謄寫す。其後また請ふものありと雖も、固く拒みて應ぜず。古賀精里いふ、春水の小楷に妙を得たるは、蓋日本史の謄寫與つて大に力あるべしと。子山陽曰く、其書初め常師なし。弱冠趙翁に學び、既にして博く諸帖を學び、自ら一家を成す。遺緊秀勁、操縱自如たり。中年顏魯公を愛す。蓋し正氣勁骨、心に契る有り。又寶晉帖中王大令卷を獲、時に臨して之を學ぶ。老

に至りて已まず。楷法莊栗、蠅頭小字と雖も、波撇勾裏、氣力周到。艸は骨肉停勻、圓健跳盪、而かも矩度を失はず。親戚往復の書翰、疾書急に副ひ、絲連髮屬するものと雖も、字字皆意趣あり。病みて且に歿せんとするに及び、猶ほ大書小字を作る。筆力少壯と異なるなし。四方争ひ索め、絹素室に滿つ。然れども勢を挟み術を用ゐ、強逼巧致すれば、則ち峻拒して一字をも與へず。僕隸の請ひと雖も、或は時に欣然として筆を援く。一老圃あり貧甚し。常に數紙を獲、人に售りて自ら活す。又賈蹟以て厚貲を致すものあり。而して古賀博士之を知る最も深く、嘗て朝鮮聘使に對し、邦人の書を論ず、君を稱して當今第一と爲すと云ふ。

梅 颯 女 史

春水の妻、靜子、梅颯と號す。山陽の母なり。大阪立賣堀町の儒者、餘田德安、又飯岡義の二女。安永八年、二十歳にして春水に嫁す。春水時に大阪江戸堀北側一丁目の濱側に住し、帷を下して徒

忘れぬや梅さ  
く宿にかりね  
ほく朝戸出に  
の月ありあけ  
はりすがたう  
まやづたひの  
すむるにあら  
神無月哉



春風ものどけ  
き宿に朝居し  
のうぐひすを  
きく

ゆく春を愛に  
や猶もとむ  
ら花の盛に  
逢坂の關

すきの浦松の  
梢に影さして  
夕日ぞ落つる  
あはちしき山

●杏坪

萬入買醉櫻  
芳叢感倦誰  
能與我同恨  
殺殘紅飛向  
北延元陸上  
落花風  
春日雜詩  
春禽姪蛇遊  
茅店日入群

に授く。月下氷人は懷德書院の中井竹山なりといふ。尾藤二洲の妻名直女、二洲の妹なり。書及  
び和歌を善くす。天保十四年十二月九日歿す。年八十四。

(二) 賴 春 風

春風、少うして浪華に抵り、醫を古林見宜に學び、又尾藤二洲と道學を講  
習す。郷に歸りて醫を業とす。人と爲り宏裕、溫醇、未だ嘗て疾言遽色せ  
ず。加ふるに學修を以てす。閭郷之を愛重す。書風和雅愛すべし。

(三) 賴 杏 坪

杏坪、初め藩の儒員となり、後郡宰に任じ晩に市令となる。治教皆績あり  
巍然として一時の師表となる。其人と爲り精溫和厚、之に接して和氣春風  
の如し。最も詩に長ず。極めて清嬌、推敵最も細なり。晩に和歌を作る。

清の俞曲園其詩を評して曰く、

喧忽已無初  
月半門隣女  
立隔花喚返  
小於菟  
素餐深愧臥  
茅廬閑盡抄  
詩煩小香隣  
老理閑無批  
政赤松黃垂  
足春蔬  
不慣由來禍  
所隨桶間風  
雨幾人悲豈  
知京利狂炎  
底復著當年  
吉法師  
邑官詩利百  
曹何所爲自  
無遺近損我  
笑書生餘舊  
態半思民苦  
半思詩

杏坪曾爲郡邑官。其在官時每留意於水旱之災。觀其  
初出督郡事。即集父老年七十以上者百二十人。飲之  
以酒。賦詩紀之。循吏風裁於斯可見。晚年致仕。築三休  
亭。尤可想其高致。其得請後詩云。獨有寸丹銷不盡。時  
時西向淚沾衣。忠愛之忱。流露言外。蓋非徒詩人已也。  
而詩亦極工。全集凡六百餘首。可傳之作。居其大半。尤  
長於古體。其用險韻。造奇句。竟有神似昌黎者。爲東國  
詩人所僅見。其近體似黃山谷。有生硬之致。而晚年所  
作。又似陸於翁。有句云。冷吟未肯入新軟。又有句云。禽  
蟲皆有天然語。草木本無人造。枝宜其似黃。復似陸也。  
詩中工於屬對。如烏鬼黃人。篠簜映馬。迷迭穆陀。黎祈



護倒之類。可見其淹博。護倒謂野韻。見陳慥詩註。亦人所罕知也。

其書妍美流麗愛すべし。與劉の餘蘭石を描く。瀟洒趣あり。

(四) 賴立齋

名は綱、字は子常、立齋は其號。京都に住し、印刻を業とす。少うして文詩に巧なり。文久三年七月十三日歿す。年六十一。京都東山長樂寺に葬る。

(五) 賴山陽

賴山陽、夙に仕籍を脱して、京師に卜居し、英邁の才を抱き、慨世の氣を負ひて、假蹇不屈、立言を以て自ら期し、日本外史、日本政記等の書を著し、尊王賤朝、氣節を磨勵し、士氣を鼓舞し、以て天下の人をして大義名

●山陽  
芳山  
花陰無處着  
啼鷹寺寺櫻  
臺閣戲櫻移  
拾夢天春日  
黑荒陵誰吊  
後醍醐  
八橋公

結髮從軍弓  
箭八州草  
木嚴成風日  
終不聽兵營  
韓立馬邊城  
看鳳鳴  
陶淵明  
群鳥遯條跡  
飲無寄奴鞭  
策捷荆吳荒  
獨掌大容松  
菊猶是前朝  
舊版圖  
伏水桃山  
萬樹桃花映  
料諒豐家談  
舊金甌春  
風曾返東征  
旂遺恨無人  
歡耕牛  
泊天草岸  
雲耶山耶吳  
寧越水天變

分の在る所を知らしむ。明治中興の大業、邁つて其原を尋ねれば、山陽の議論、與つて大に力ありと謂ふべし。抑も當時幕府の威權熾盛、犯に觸るべからず。山陽獨り直筆を把りて、強禦を避けず。古を論じて今を格す。其心誠に苦し。幸に其身を保つと雖、窮蹇以て歿す。然れども盛名赫奕、五家の村、三戸の邑、尚ほ日本外史を藏せざるもの無く、皆其名を知り、其人を追慕す。上下三千載、鴻儒碩學多しと雖、其盛名に至つては敢て及ぶものあらず。宜なり世人其遺墨を寶重し、斷簡片楮尚ほ龍角鳳毛の如くすることや。

凡そ學識あるものは、其書工ならずと雖、其力自ら筆墨の外に現はる。山陽の書に於ても亦之を見るべし。彼書家者流の胸中蘊ひ所なく、徒らに力を區區たる破礫擦の法に用ゐるものと、其風神の高卑豈啻に天淵の差のみならん哉。其書恣態横逸、用墨純ら生趣を以て勝を取る。殊に國字書



歸青一葉萬  
里泊舟天草  
洋煙橫遠窓  
日漸淡昏見  
太魚波間跳  
似月  
豐公  
精洲在手打  
爲丸黃鉞東  
西試諸婦漢  
將翁存似與  
面楚人離道  
外談定風雨  
草莽英雄起  
志大爽盤肝  
隨寒二世休  
燈寒翠短溪  
同六國太觀

巖に至りては、天真爛漫、流風の雪を回らし、落花の草に依るが如く、尤も絶韻たり。獨り其語言の天下に妙なるのみにあらざる也。初年父春水に肖たり。既にして右軍兵原の意あり。中年董其昌に入り、晚年米に歸す。其三變皆家之を知らざるべからず。夷山子曾て著す所竹莊書談に曰く、賴山陽先生以學問文章一鳴一世。其書固不過緒餘。然天分既高。故豪放跌宕。矯矯然如鳳驚于雲際也。其法自米元章來。參之以義獻之神。先生題彼崎小竹書曰。世以書家名者。所不及。其胸中萬卷融出。個個凝結也。蓋夫子自道也。其畫山水。必ずしも格法に合はず。然れども筆墨沈厚にして氣韻瀟灑。峰巒樹木蒼蒼莽莽の致あり。皴法焦法披麻を用ふ。其技巧ならず。其巧ならざる所。却て奇致多し。是亦書卷の味人の眉宇を撲つ。田能村竹田曰く、

書畫題跋。山陽特得。宋元人遺意。分宗派。稽古今。辨是非。核真贋。其所論各有斤兩。一一相當。無妄評。與從前儒士隨口品評。任筆頌揚者大不同也。故余謂山陽儒而解六法者。

山陽讀書餘暇。動涉繪事。運筆行墨。不必合格。然從書法中來。風致自然。出脫時。舉世爭以爲珍矣。蓋平生高尚之氣。溢出楮墨間。故爾。

其畫固未工。而嗜好之深。染濡之久。加之讀書萬卷。風趣逸上。自有足觀。得者寶重。以比圭璧。

山陽名聲海內。其子先考の談に、當時一點奴、山陽と假稱して北越を遊歴し、多く潤筆錢を獲たるものありと、又菊池五山の記する所に曰く、某の士に人の山陽と假稱するもの、一茶家に寄食して、濫に簡牘を占むと聞き、朝これを浪華の金谷生に語る。生乃ち山陽に報ず。山



文字揮毫不補饑。名如畫餅豈其非。他一箇陳驚座  
飯袋便便到處肥。

夷山子會て之を人に聞く。山陽既に没する後、一書生あり。作りて山陽の次子、故ありて兄の容  
るゝ所と爲らずと稱し、鎮西を歴遊す。至る所爲めに道を設け、書を乞ふもの甚だ衆し。偶  
人の西遊するものあり。邂逅して與に語る。生、家中の秘事を説くこと甚だ詳なり。某信じ  
て之を憐み、謂つて曰く、余兄を知るもの、請ふ爲めに其怒りを解かんと、因りて拉して俱に  
還る。嚴島に到る。生曰く家兄怒ること甚し。余今遽に家に還れば、則ち其怒り益々劇しか  
らむ。請ふ子余が謝書を携へて、先住きて之を謝せよ。某廣島に抵り聿庵を見、爲めに之を遣ふ。  
聿庵喜びて曰く、吾弟、幸に恙なき乎、我久しく之を見んと欲す。請ふ速に携へ來れと。某  
復嚴島に至れば則ち生は既に遁げたり。反つて聿庵に告ぐ。聿庵笑うて曰く、余索此弟なし。  
然れども其所書變絶、先君子の子たるに愧れず。且つ先君子の名を假りて歴遊す。骨肉に非すと  
雖、情亦親しむべし。生若し來らば、我將に弟を以て之を害はんとせむなりと。其書を出して  
之を見れば、則ち困窮窮乏、名を同じ食を謀るの罪を謝するなりといふ。ある人曰ふ、是れ播州  
の一書生にして、三備の地をも遊歴せしと。

(六) 賴 聿 庵

聿庵、名は元協、字は承緒、餘一と稱す。聿庵は其號。山陽の長子なり。  
山陽故ありて國を去る。祖春水取りて養育し、弟杏坪をして之を教習せし  
む。嗣子元鼎歿するに及び、聿庵嫡孫を以て後を承く。繼ぎて藩學教授と  
爲る。食祿百八十石、天保三年准近士に班す。八年百二十石を加賜せらる  
十二年近士に陞る。時に執政今中大學權を弄し私を營む。群僚畏懼して  
敢て觸犯するもの無し。聿庵之を疾む。一日侯召して大學を講ぜしむ。因  
りて經義を敷衍し、其罪を數へ、痛く之を詆る。聽くもの皆駭く。大學大  
に怒り、目して狂人と爲し、職を褫ちて老を告げしむ。時に嘉永三年なり。  
既にして侯その讜直を嘉し、特に終身五口俸を賜ふ。聿庵人と爲り、卓犖  
不羈、父の風あり。世と合はず。胸中不平一に麴蘖を假りて之を洩らす。



行事往往規度の外に出づ。人益以て狂と爲す。然れども其孝友篤摯、亦頗る稱すべきものあり。山陽晚年江都に移住する志あり。韋庵東役、館舎を備へて以て待つ。會山陽病歿して果さず。深く之を憾む。二弟尙幼なり。乃ち支峰を拉して國に歸り、教育すること十年、且數金穀を餽りて之を周給す。又善く祖母飯岡氏に事へ、色養備に至る。其病ひや、名醫を招きて治療す。善藥あるを聞けば、價を論ぜずして必ず求めて之を進む。家産爲に傾けども顧みず。御園氏父の先妻の後再嫁す。賤しくして且つ貧し。其病みて將に死せんとするとき、醫藥給せず。韋庵聞きて奔赴護視す。帶を解かざるもの連晝夜、猶ほ義として迎養し、天壽を全うする能はざるを以て憾みと爲す。安政四年丙辰八月晦病んで歿す。年五十七。其字を作る、運腕意の如く、筆勢奔放す。風格父に肖たり。晩年病の爲に亂筆體を失して前日の如くならず。殊に惜むべし。

(七) 賴 支 峰

支峰は父の門人後藤松陰及び牧百峰等に學び、後帷を京師に垂れて徒に授く、明治元年、東京に抵り、大學二等教授に任じ、同二年大學少博士に進む。後辭して京都に還る。明治二十二年七月八日歿す。年六十七。文詩を能くす。第三樹に比すれば精練はありと雖、着想の奇、氣魄の雄に至つては三樹に及ばず。書風父に似たり。

(八) 賴 三 樹

三樹別號氣節を以て世に顯はる。嘉永安政の際、尊王攘夷を唱ひて幕府に捕はれ、斬に處せらる。時に安政六年十月七日、年三十五、少より才敏にして多く書を讀まず。詩文を作るに、前人の未だ道はざるものを求めて之

●支峰  
八幡公  
多年百戰不  
懈功又捷征  
施向海東勒  
馬空吟惆悵  
句勿來關外  
落花風  
佐佐木盛  
奮鞭躍馬破  
波光智勇同  
功排夢香若  
把寬川比藤  
戶四郎未必  
勝三郎

●三樹  
笠置潛幸  
天地何邊容  
聖駕滿山風  
雨御衣潤宴







を言ひ、落想人を驚かす。語雅馴ならず。動もすれば、儕輩の驚歎する所と爲る。然れども願みず、大言して曰く、吾豈文字に老死するものならむ

来老還國之孝

文孝 賴復

やと。其人と爲りを知るべし。詩は梁川星巖に學び、其瑕玼多きを以て、毎に呵責する所と爲る。書法は初め父山陽に酷似す。後祝枝山を學ぶ。

福の屋 賴復



山陽門人

名は機、字は世張、初は鎌山又兼山と號す別に春草の號あり

〔名家評判記〕 上上吉  
頭取 若年はやくちから浪花ななばなへ出られて才名さいめいを振ふるはれし松陰先生しょういんせんせいでござります

名は輓、字は信侯、別に蕙齋と號す。通稱善助。美濃の人。

〔名家評判記〕 上上吉  
頭取先生は當時京師での花形でござります  
ワル吉美濃もので人が

けねいといふこつた。山陽の高弟を鼻にかけ、やたらに高ぶるから、人がきらうばかりか、女房

本福原氏、名は戡、字は晋戈、繁太郎と稱す。安藝豊田郡

戸野村とのむらの人。天保十年福山藩の儒員となり又軍學師範となる。晩に東京

名は鼻、字は細香、湘夢と號す。字を以て行はる。美

濃大垣の人、初め玉濤和尚に従つて墨竹を學び、後浦上春琴に問うて其格を變ず。筆力剽利、秀韻あり。其名天下に轟く。故ありて終身嫁せず。文久元年九月四日歿す。年七十五。大垣藤江村禪桂寺に葬る。遺墨價貴し。

鴻雪（はくせつ）曰（い）く『細香女史（さいかうにょし）、文學（ぶんがく）を好（この）みて女儀（にょぎ）を失（うしな）はず。而（しか）して憂國（ゆうこく）に切（せつ）なり。屢（しばしば）黨議（とうぎ）を起（おこ）し、發（は）

眉男兒をして愧色あらしむ。旁六法に精し。最も墨竹を善くし。揮灑を乞ふもの四方靡至す。往

年輩氏の夜宜女史の竹を作るを覽る。落筆瀟灑として軸に扇を置。而して添墨濃淡、自然宜しきを得たり。余能みて其故を問ふ。女史笑うて曰く、老眼紅色を辨せず。唯筆に因りて作るのみと。

蓋心に得て手に應ずるなり。

山陽門人

4011

兩鋪陽山	分酒依瀟	皎清窓窓	讀掩笙簫如晚	搗老臣舌翠手
漁溪多山題	字隱隔溪同	月竹中外竹題	書新架月欲窓	一任自破華決大
村翠江收	盡上人雨風	玉振弄脩	涼潭門欲風一事	使有天涯誰勝塔
垂螺水月	重未及前	寂寂影風	已未昇却雨	黃術家國慶宮
揚三平夕	筆窺龍竹	神水人竹	到香勿簫白	臺山陳長迎



外牙頭筋子

門田朴齋

二村

名は重隆、字は亮佐。幼字小三郎、又正三郎、備後安那郡百谷村の人。福山侯の侍讀となる。明治六年正月十一日歿す。年七十七。

大白

西法成寺村小向山に葬る。

鹿角

兒玉旗山

知半

名は慎、字は士敬、通稱三郎。加賀の人。京都に帷を下して徒に授く。天保六年正月二十六日歿す。年三十五。東山長樂寺に葬る。

獲角

關藤藤陰

藤

名は成章、字は君達、初め石川氏を冒し淵藏と稱し、中ごろ和助、後文兵衛と稱す。晩に關藤氏に復す。備中吉濱の人、儒を以て福山藩阿部侯に事へ、累進して執政と爲る。明治九年十二月二十九日東京に歿す。年七十。谷中天王寺に葬る。

虎一

藤井竹外

幾

名は啓、字は士開、又強哉、別に雨香と號す。通稱啓次郎、攝津高槻の人。詩を善くして七言絶句に長じ、絶句竹外の名大に世に鳴

幾

る。慶應二年正月四日歿す。年六十八。京都東山長樂寺に葬る。

幾

「花朝下澱江」桃花水暖送輕舟。背指孤鴻欲沒頭。雪

幾

白比良山一角。春風猶未到江州。

幾

「風雨望寧樂」半空湧出兩浮圖。更有伽藍俯九衢。十

幾

二帝陵低不見。黑風白雨滿南都。

幾

「芳野」古陵松柏吼天颺。山寺尋春春寂寥。眉雪老僧

幾

時輟簪。落花深處說南朝。

幾

家長賴庵

幾

名は淳、字は伯厚、大和葛上郡小股の人、慶應二年十月二

幾

十二日歿す。

幾

宮原節庵

幾

名は龍、字は子淵、潜夏、易安、栗餘、池南は晩年の號な

幾

り。緒餘書法に巧みなり。明治十八年十月十六日歿す。年八十。京都大

幾

德寺中黄梅院に葬る。

幾

讀出師表

幾

與漢撫事

幾

兩忙臨師感

幾

激吐心腸中

幾

原未復星先

幾

隆一表長留

幾

日月光

幾

上騎驢圖

幾

韓世忠湖

幾

山陽門人

幾

六五



川上東山 名は順、字は君暉、通稱儀左衛門、江戸の人。天保十一年八月二日歿す。京都千本頭十二坊中佛眼院に葬る。



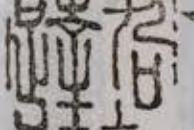
森田節齋 名は益、字は謙藏、大和宇治郡五條驛の人。晩に紀州に至り帷を垂れて教授す。文章を以て世に名あり。明治元年七月二十六日紀州荒見村に客死す。年五十八。村の善通寺に葬る、節齋時に畫山水を作る、格法拘はらずと雖、風趣自ら存す。今日其價甚だ貴し。





岡田鴨里 本砂川氏。名は僑、字は周輔、淡路津名郡王子村の人。出でて三原郡掃守村の岡田氏を嗣ぐ。徳島藩侯に事へ。洲本學問所の教授と爲る。明治元年擢じて參政に任ぜらる。致仕後郷に退隱す。明治十三年九月五日歿す。年七十五。池上山に葬る。

村瀬藤城 名は聚、字は士錦、通稱平助、又平次郎、美濃上有知の人。村瀬太乙 名は葵、通稱泰一、又外太郎、美濃上有知の人。山陽歿後

松陰主人校



家長信理書詩  
 為七十人  
 福山溪藤成章撰并書  
 山外  
  
  


旗山慶士  
  
  
  
  
 児玉慎  
 清史字多龍

名古屋長島町に抵り徒に授く。天保の末年、犬山侯の儒具となる。緒餘山水人物を畫く、福落疎放、畫法に拘拘たらざる也。而かも頗る奇趣あり。清人之を賞して購ひ去ると曰ふ。明治十四年七月歿す年七十八。



●栗園  
詠史  
強使柔翼奉  
酒屈舞衫不  
陶翠眉垂源  
公事榮總如  
意難折爲原  
花一枝

其他門に遊ぶものに神田南宮實甫鹽谷宕陰、野本白巖、川村竹坡、漢法醫  
淺田宗伯等あり。一一此に擧げず。宗伯は其人と爲り仁厚尤も尙ふべし  
詩文書に妙なり。

栗園淺田常  
惺堂  
外書

彼崎氏一家

(一) 彼崎三島

●三島  
燒始  
墨江文始勝  
限顯豐鼓天

三島名は應道、字は安道、長兵衛と稱す。三島は其號、浪華の人、家商を  
以て業とす。三島少より亦之に従ふ。然れども性學を好み兄樂郊に従つて

然調味殊欲  
撰高僧德本  
佛非求老蚌  
出明珠沸漿  
溢處火文武  
豐肉飪來月  
有無況是功  
能添眼力使  
蘇何用學得

經史を學び、後菅甘谷に徂徠の學を問ふ。葛子琴、細合半齋は其同門の友  
たり。又片山北海の混沌社に入りて詩を攻む。年四十、家業を改めて、帷を  
下して徒に授く。弟子歳に進む。三島卜筮音韻の類、討究せざるなく、又天  
文を麻田剛立に學ぶ。文化十年癸酉十月晦歿す年七十七。子なし。晩に妾  
一女を擧ぐ。義子駒に配す。駒は小竹なり。三島の墓は天満寺町天徳寺に  
あり。『三島彼崎先生墓』と刻す。子孫の墓亦此に列す。三島の碑文は、  
其友古賀精里之を撰し。墳諱並に表は、其友賴春水之を書し、精里の文は  
小竹之を書す。墓碑一時の名家を運署せる此くの如きは、多くあらざる所、  
盛んなりと謂ふべし。

三島最も書に巧なり。楷行皆其奥を究む。曰く我草法に於て、未だ得る所  
あらずと、乃ち精習多年、遂に一家を成す。賴春水深く其書法に推服す。  
小竹が跋、先君子蘭亭帖に曰く、



往時精里先生。稱春水先生。書爲天下第一。而春水先生。則推先君爲不可及也。以不肖觀之。春水先生。筆才縱橫。譬諸文。猶東坡先君。則沈着渾雅。猶南豐。南豐之文。有好奇者。有不好者。然東坡托父祖碑銘。不於他人。必於南豐。則春水先生。數來繼素。屬先君書也。其意非虛推可知矣。此蘭亭帖。富永氏所藏。拜覽畢而書。

(二) 筱崎小竹 義子竹隱 門下四天王

●小竹  
捕公  
兵機妙用恰  
如神自是中  
興第一無人可  
憾君王無皂  
白令臣累世  
作忠臣  
同  
元安皇親親  
如絲誰意忠

小竹は三島の義子なり。初め業を義父に受く、年二十八、江戸に出て、昌平黌に寓し、古賀精里の教を受け、半歳ならずして去り、家を承けて教授す。子弟日に進み、家聲益隆なり。文詩を作るに、甚だ刻苦せず。而かも妙に入らざるなし。尤も東坡の詩を喜ぶ。蓋し汪洋放肆に取るなり

良萃一家聲  
下疾風無勁  
草山中晚節  
有黃花東魚  
西鳥天心應  
前虎後狼入  
事差當日攝  
河張陣地空  
合志士憶義  
斜  
備後三郎  
題詩圖  
忠憤題詩感  
鬼神山樓應  
赤腰西巡他  
日南中花萬  
樹開成正統  
一玉春  
●竹陰  
決死見機明  
若神何唯兵  
略比張巡君

書は則ち初め家法を傳へ、後趙吳興を學び、李北海に溯る。晩年自ら一機軸を出す。流麗雅健之を兼有す。書名海内に噪ぎ。王公士庶、書を請ふもの四方靡至し、一時書を著すもの、必ず其序跋を待ちて後版を開き、詩文を作るもの、必ず其評語を得て後世に街ふ。人家門楣上、柱壁屏障間、必ず其揮毫を得て、而る後以て光輝ありと爲し、貴賤を論ずるなきなり。三男あり。皆天す。三女の長は、後藤松陰に嫁し、次は義子竹陰に、季は濱田藩奥村克對に歸く。其門人中、四天王と稱せられたるものは、

(三) 筱門四天王

小竹

- 筱崎竹陰 名は義、字は公衡、通稱長平、別に納堂と號す。安政五年八月歿す。
- 奥野小山 名は純、字は溫夫、通稱彌太郎、別に昨庵と號す。
- 安藤秋里 名は秉、字は維義、通稱彌太郎、別に介軒と號す。
- 橋本香坡 名は通、字は大路、通稱牛助、別に靜庵また毛山人と號す。



王一夜春開  
曉不省行宮  
夢裡人  
恨被風塵磨  
海程楚材晉  
用未為榮東  
望三笠山邊  
月獨照臣心  
萬古明  
●小山  
陳國南  
莫道神仙無  
事功出山勸  
說代河東誰  
知一戰擒劉  
策正在先生  
熟寐中  
朋至自遠  
方喜而賦  
出門童摘雞  
腸菜迎客鄰  
屠牛尾魚

餘為子

少於

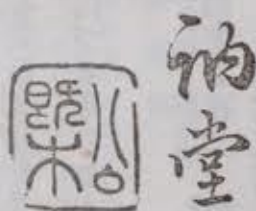


散人書

醉對花須急  
賞陽春有脚  
不徐徐  
●秋里  
寢語里  
類垣茅屋舊  
比隣紡績聲  
中笑語親國  
界涓涓三尺  
水浙人燈火  
照國人  
丹後道中  
慣聽鞋底石  
泉聲日日橫  
帆為送迎八  
月秋風丹後  
路著花山草  
不知名

少於散人題

作陰省人



浪集與題





文化文政以後、（けい）經學に達きもの漸く少し。（し）然れとも文詩の能手輩出し、各  
休明を鼓吹し太平を謳歌す。徳川氏三百年間、此際を以て最も盛なりとす。  
○松崎慊堂 初め程朱の註を用ゐ、年五十に至つて發明する所あり。更に  
漢唐學を攻め、又爾雅說文に耽る。學殖淹博、其右に出づるものなく、文  
辭蒼老古雅、彫琢を須ゐずして自ら風度あり。後出  
○佐藤一齋 學、程朱を奉ずと稱すと雖、實は明の王陽明を喜ぶ。故に陽  
明陰王の謾あり。其文一字も刻意鍛鍊を経ざるものなく、汪洋渾灝、深く  
陽明の神髓を得たり。後出  
古賀侗庵 儒官たるを以て程朱を奉ず。博洽にして兼ねて文を能くす。筆  
力鼎を扛く。極めて氣骨あり。前出

## 七六

○長野豊山 學、三博士に受けて、深邃宏博、其文雅潔なり。惜いかな狷介世に容れられずして歿す。遺墨世に尙存するもの無し。

○朝川善庵 山本北山の門に出づ。尤も經學に精し。東條一堂と共に考證を喜ぶもの也。書風一格を出だす。價賤からず。

大極上上吉

朝川鼎  
號名  
善鼎  
庵字  
五鼎

頭取 當時での経験は、折衷家の大家でござります。文章は自分も出来ぬといはれますが、経験は錦旗渡せられてより、此先生に及ぶ者はございせんワル。口いやく孝經私記の御手際では壯年のときなれども、つんとお力が見えますが、近頃の大學釋義で、却てぼろが見えました。まして昌平橋の諸先生がこれゆゑに彼是と評がござります。其上僞君子と申事が、世上に申しますゆゑ、これが白璧の疵でござります。ヒイキいやく僞君子だ。一齋さへもさるおやしきでやりましたゆゑ、まして先生は勿論なり。

○仙臺の齋藤竹堂 文章暢達、惜いかな早く歿す。遺墨甚だ鮮し。

○京師の猪飼敬所 博聞強記を以て海内一人と稱せらる。文詩は其長する

七七



所にあらす。遺墨鮮し。

○頼山陽 經藝に疎と雖文章に至つては、海内敵なく、議論叙事、才識並び高く、殊に叙事に至つては、妙絕古今に獨歩す。詩は務めて實際を叙し、虛設を事とせず、詩佛五山の徒、纖巧淺俗、七律の詠物を得意とするに反し、古體長篇を作り、詠史を得意として、雄渾跌宕千古を凌轡す。雅に謂つて曰く「余詠物を欲せず。詠物は詠史に若かず。史中無數の好題目あり。皆眞詩を成すべし。之を含て、而して雁字鶯梭を曰ふとも益なし」と。兼ねて書畫を能くし、風流韻事を以て海内の欽慕する所となる。前出

○梁川星巖 敬所、山陽歿後、詩を以て京師に覇たり。材を取る浩博、法を持する謹嚴、唐詩を稱すと雖も、力を清人に得るもの也。或は曰く、浙西六家を帳中の秘本とすと。海内詩に名あるもの皆其門に出づ。後川

○大阪の大鹽中齋 人となり豪邁不羈、書を讀みて眼光紙背に徹す。學術

〔木村芥舟著笑囃樓筆談〕 岡本黃石翁の語に、予が少壯の時、面會したる諸先輩のうち、體貌俊

傳にして珠に立派なりしは、渡邊華山と大鹽傑素との二人なり。誰が見ても、大國の藩老なるべしとの感あらしむ。吾輩共に立ちて慚かしく思ふ程なり。頼山陽は容體卑野にして思ひしとは大に違へり。又其講釋をなせるを聴くに、極めて拙にして明晰ならず。文章の手際とは雲泥の差あり。

りとなり。  
 のさきやちや  
 ○彼崎小竹 文を以て其名海内に鳴る。天才秀拔、敢て刻劃せずして自然妙秀なり。書を著すもの、其序跋を請ふ。前出

○丹後田邊藩の野田館浦  
文才情を以て勝る。其書研美流麗、後人之愛  
玩す。

○安藝の坂井虎山、文章雄勁挺拔、縱橫馳騁、其意の出づる所の如し。山陽歿後、關西の文柄、遂に虎山に歸す。

○阿波の柴野碧海  
文章精練、能く唐荆川を學ぶもの也。前田

七九

豈惟今。  
 物人能存道。  
 語蘇樹先  
 生墓  
 院畔古藤花  
 盡時泛湖來  
 拜昔寶碑餘  
 風有似比良  
 雲流滅無人  
 致此知  
 ●笛浦  
 八轡公過  
 勿來關  
 白旛風起  
 谷畔遙望口  
 驚龍虎成峰  
 馬不前如  
 路落不關  
 灑戎衣  
 納涼  
 夏雲擊絮



斜明細葛含  
風步步輕  
點燈橋外  
市龍蟲一  
賣秋聲  
●虎山  
遊橫川作  
胡枝叢外  
半帶落花  
雨是前宵  
人非昔日  
亂鴉荒寺  
壁藥古城  
待月停露  
暗難不可

七十ハ翁  
第浦  
丹後野田送  
善庵陳人  
竹居題



○鎮西の帆足萬里 經術湛深旁ら釋氏西洋の書に通ず。文章簡練明暢  
西漢の風あり。詩は逸宕健雅、一も彫飾俗に殆はず。  
○廣瀬淡窓 詩に長じ、格調適美、句法渾成、近體に於て尤も委婉悠揚の  
致あり。故に海内之を稱して宜園調と曰ふ。

天保二大儒

(一) 佐藤一齋

●一齋 太公望  
誤被文王載  
得歸一竿風  
月與心遙想  
君牧野鷹揚  
後夢在磻溪  
舊釣磯  
漫言  
斯文喪隆有  
誰承天地人

天保の前後 博學能文の大儒を擧ぐれば、先づ首めに指を佐藤一齋、松崎  
懋堂に属すべし。一齋は初め林氏の塾長たり。後幕府の儒官となる。天  
下の人目して山斗と爲し景仰せざるなし。侯伯以下迎聘講を聴くもの前後  
數十家。或は駕を官舎に枉ぐ。凡そ士民の門に入るもの、無慮三千人に及  
ぶといふ。其諸侯の邸に到りて經を講ずるに、日給するに遑あらず。率ね



心無古今。偶坐夜堂。窺斗象。珠疑光彩。照吾襟。同落乾坤。人亦無誰。歎自名。與利多爲。果一過此。關。纔丈夫。

東		西	
大關	松崎 惟堂	大關	猪飼 敬所
關路	佐藤 一喜	關路	頼山 陽
小結	朝川 善庵	小結	松本 愚山

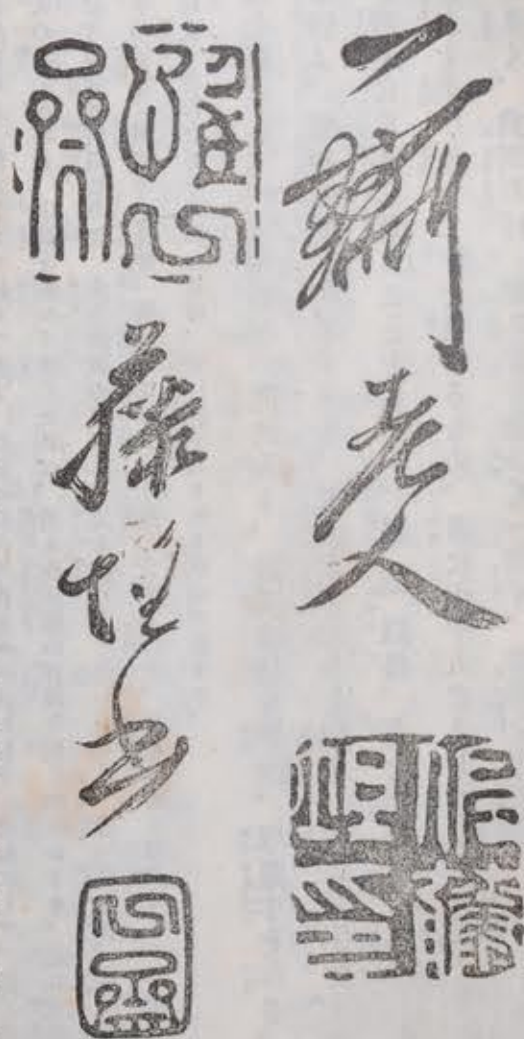
日に數家に到り、或は夜に及び、殆ど家に居ること少し。著述の如きは、大抵夜中に成る所、毎夜明燭煌煌、襟を正して端坐し、或は五更に至りて寢に就く。月に得る所の金三百兩に上るといふ。天保中江戸に於て好事の徒、儒者番附を作りて、世に公にせしものあり。東に江戸の諸儒を列し、西に京坂の諸儒を擧ぐ。猪飼敬所之を見、門人某に與ふる手簡に曰ふ。

八月六日の貴書二十八日到着、近來何者歟、儒者番附、出候由、當夏江戸神田聖堂に寄留致候森田謙藏(節齋のこと)より申來り候京師にても先頃より流布の由、佐藤一齋愛日樓集日野公へ托し拙評を被乞候。一覽致候處、議論正大、文章縝密にて當時無雙、不能贊一詞。京師諸儒皆其文章に服し候。此人王陽明を宗とする故に、其學は可栗本飽庵曰く、濱松侯老中の首座に在りて、宿弊改革の世となり、昌平黌は儒官依田澤太左衛門先生他轉し、其跡へ佐藤一齋先生徵されて儒官となる、年七十一。道德文章、當時稱して泰山北斗と仰ぐ人なれば、諸生皆良師を與へられたるを觀せぬは無し先生は宿儒、重望なる上に、勤止閑雅、衣冠清楚なれば、接する人事に敬服せざる無かりき。殊に講義の名人にて、能く疑義を解釋して、人の腹中に入らしむる事、他生の及ばざる所なりき。其時老學の評に、室鳩巢が講義の妙なる、壁を隔て、聽くに焉哉乎也の助字迄も、能く分別せられたるが、其人逝きて以來、一齋先生の如き、妙なるもの絶えて無し。尾張の細井平洲如來山人の如き、能辯にして、能く愚陋愚夫の耳に入れど、字義を離れて講じたれば、恰も説法僧の談義を聞くに近かりき。是れ先生に及ばざる遠き所以なりと。先生講義の中にも、尤も妙なりと覺へたるは、易の象辭傳、書の洪範孟子の養氣、論語の一貫杆、他人の口に入るを難しとする所を、平坦容易に解説せられ、聞くものに能く會得せしめられたるは、實に驚き入りたる事にてありき。

書は七歳にして、三井親和の門に入り、篆隸諸體を學び、擘窠字を作る。或は曰ふ。親和一齋が刻苦すとも、天性書才なきを以て、之に習字を止め力を讀書に専らにせんことを勸むと。弱冠以後、意を用ゐず。然れども其盛名を慕ひ來りて字を索むるもの、月に幾十人なるを知らざる也。晩歲尤も多く、輿到れば、則ち意に隨ひて一掃す。按排を費さず。而して位置



宜しきを得、筆力遒勁なり。當時米庵、菱湖、書の專家を以て名一世に高し。然れども一齋に書を索むるものは、此二家よりも多かりしといふ。是れ遺墨の今日に尙存するもの多き所以なり。



一齋門人

安積 良齋	池田 草庵
竹村 悔齋	山田 方谷
大橋 訥庵	吉村 秋陽
昌谷 精溪	若山 勿堂
河田 藻海	柳澤 芝陵
佐久間象山	三谷 慎齋

一齋

(二) 松崎 謙堂

●謙堂  
陸中三顧  
三風將軍不  
誇主君臣道  
合豈偶然臥  
龍始遇風雲  
起漢業偏安  
唯是天

謙堂は幼時一向宗の僧たり。年十五、儒に歸せんと欲し、江戸に出奔して林大學頭信敬に學ぶ。即ち佐藤一齋と同門たり。享和二年、老中掛川侯太田備中守資愛辟して藩の教授と爲す。謙堂獨り學事のみならず、政治の諮詢に應へ、匡翼する所甚だ多し。文化十一年仕を致し、養老俸若干を



同  
大夏嵒能一  
木支洪歎炎  
運總差池出  
虛爲感君恩  
切成敗利鈍  
非所知

賜はる。後山を羽澤村に買ひ、草堂を築きて之に居る。天保十三年三月、幕府召見の命あり。四月朔、將軍愼徳公に謁す。將軍の儒士を見るは、享保に物徂徠の事あり。致仕するものに至りては、則ち江戸開府以來、未だ曾て有らざる所なり。世人以て榮となす。其學該博覽通、闢はざる所無く、最も經義に達し、初め朱註を用ふ。年五十發明する所あり。更に漢唐の古學を攻む。世、一齋謙堂と並稱す。而して謙堂學問の博大、一齋に勝れり。其文辭、刻削彫飾せずと雖、符采奕然たり。猪飼敬所二家の文を評して曰く。一齋の文は和人の巧なるものなり。謙堂の文は漢人の拙なるものなりと、蓋し當れり。  
重野成齋、昔昌平覺にある時、尾藤水竹を訪ふ。水竹曰く、吾一齋先生を訪ふ毎に、其談論を聞く。娓娓人を悦ばす。然れども一たび其門を出づれば、則ち索然として味なし、謙堂先生に詣る。其言を聞くに、樸茂にし

海老名



て奇ならず。然れども久しうして之を思へば、益其味あるを覺ゆと。是れ亦其文の如き也。蓋し其人慈厚高明、内外朗映、一點争競の念なし。故に外に發するもの、皆此に類するある也。

〔名家評判記〕

大上上吉

松崎退藏 名復、字明復、

號懷堂

〔頭取〕當時の立者、説の儒者と申へき先生でござります。世の中に語ふことを厭ひ羽澤の山莊に引込みまして御名は下町に住居の人より高うござります。其上博覽旁通右に出る人はござりますまいワルロいや／＼説文でござります、たゞ／＼古物癖で、個箇の先生で、一向宗のくせが今にと

れません。其書風、一齋は渴筆怒張、千筆一様、時を異にするも巧不巧なし。懷堂は暇餘古法帖を遊び、懷素の千字文を臨摹すること二百通に及びたることありといふ。故に頗る巧みなるものありと雖、亦甚だ拙くして別手に出づるが如きものあり。蓋天性書を能くせざるなり。賞鑑家能く之を知り、其拙さものと見て、漫に贋作となすこと勿れ。

## 説文二家

懷堂は晩に漢唐の古學を攻め、又説文に精し。而して之と時を同じくして亦説文を究むるものに、狩谷校齋、山梨稻川あり。懷堂此二人と友善し。二家の遺墨甚だ少く、共に好事家の賞玩する所たるを以て、未だ其書風を見ざるものゝ爲めに、爰に落款を示す。

### (一) 狩谷校齋

接齋は博聞強記、學漢唐の注疏を主とし、家、甚だ藏書に富み、唐鈔、宋槧、元刻、晉唐の碑刻法帖、極めて得難しとする所のもの、亦多く兼儲し歴代古泉貨幾百品あり。之を愛玩し、或は清閑興適に遇へば、窓間に攤列して之を品評す。又漢鏡、漢錢、王莽の威斗、中平の雙魚、洗三耳の壺を

●校齋

詠説文

文字のせき  
まだこゝろ  
とぬたひ  
おくをばい  
かて知るべ



藏す。因りて六漢老人と號す。  
或人曰く、是れ五漢なり。其一是  
何に在る。檄齋笑うて曰く、身  
漢唐の學を嗜む。乃ち亦漢時の物に非ずやと。其書法虞世南の風あり。獲  
るもの珍愛す。

(二) 山梨稻川

稻川初め東平、駿河盧原の人、篤古の君子なり。經史に精通し、詩及び古  
文を能くす。又數學に邃く、音韻の學及び説文を鑽究して發明する所多し  
八歳にして字を一乘僧院に習ふ。讀きて右手を損す。惟他の字を作るを  
視る。師叱して曰く、汝何ぞ愚めざると。稻川曰く、諸、便ち左手臨倣す  
沿習の極、終身左書す。篆隸行草運腕飛ぶが如く、皆晋唐の勝境に入る

釣鐘雙  
題雙鯉圖  
故人深住白  
雲城遺我仙  
潭雙鯉魚我  
欲乘之向煙  
霧口中銜得  
鍊丹書

稻川居士書

其人大都に居らざるを以て、汎く其名を知られず。歿後五十年、清の俞曲  
園其詩を讀みて之を評して曰く、  
才藻富麗。氣韻高邁。在東國詩人中。當可三首屈一指。五七言古詩。尤  
其所長。七律亦雄壯。  
と其賞揚至れり。これより我邦人爭うて其詩を讀まんことを欲し、其詩抄  
價僅に數十錢のもの、俄に拾數圓に騰り、遺墨も亦價甚だ貴きに至る。

安政前後の諸儒



弘化嘉永以後、著宿相繼ぎて凋喪し、而かも後進の能く之に繼ぐものあらず。儒林年に寂寥たり。其經藝文章を兼ね能くするものは、安井息軒、鹽谷宕陰を推さざるべからず。息軒、宕陰は吉野金陵と共に幕府の儒官となる。三士同じく古學を奉ずるもの也。而して幕府の公學は、専ら朱註を用ゐたり。三士の其選に當るもの、適以て林氏は述齋の後、子孫皆鈍根凡種、天下の學術を統一振興するに足るの材なきもののみなるを知るべし。且海内多故、兵馬倥傯、幕府日に衰ひ、將軍終に大政を奉還し、明治中興の大業成る。時勢一變、人人西洋物質的文明に眩惑し、浮華輕佻、斯文を顧みず。狂瀾既に頽れて、大儒漸く迹を絶つ。邦家の前途、亦洵に寒心に堪へざる也。

○藤森天山 林鶴梁 共に長野豐山の門に出づ。天山の文は法度謹嚴、言語流暢、氣格淵雅、蓋則を唐宗に取るもの也。詩は五言古詩に長ず。出後

○林鶴梁、文章練熟を以て勝る、其書法頗る巧なりと雖、容易に人の索に應ぜず。故に遺墨少し。

○安積良齋、一齋の門より出づ。息軒、宕陰、金陵の三士に先ちて幕府の儒官たり。學術宋を奉じて雜駁ならず。文章矩度謹嚴なり。書法は巧みならず。

〔名家評判記〕

安積祐助 名譽 字思順 號良齋

富士山 秦皇探藥竟 難逢東海仙 山是此峰萬 古天風吹不 折青空一朶 玉芙蓉 陳國南長 鐵馬黃袍映 日還山中自 此應閑趙 家三百年宗 社不異先生 一夢間

○大坂の藤澤東暎、學、物氏を奉じ、別に一家を成す。書法巧ならず。



●東歌

遊櫻祠  
十里長堤春  
色誇紅紅白  
白浪流霞道  
遙吟過情難  
低航去更看  
西岸花  
雜種艷菊  
大似車輪小  
似錢滿紅  
紫春秋研如  
今四海昇平  
化逸隱觀隨  
富貴緣  
盆梅  
一室清香冷  
夢魂曉寒不  
復出柴門孤  
山殘雪暖浮  
月牧在香家  
小瓦盆

〔名家評判記〕

大極上上吉

〔頭版〕東西くこれは當時浪花の立者かぶ 五町の親玉でござります さいき先生は修學でも切ぬきはなされません。清人錢梅溪に與ふる書にて御見識のほどが見えます 〔ワル〕ロ先生は何より人物がいといふ った。しかし田舎兒を免れません。

○仙臺の大槻磐溪 衆技を博綜し、専ら力を文詩に用ゐる能はず。故に平淡味に乏し、書法は幼時卷菱湖に問ふ。好みて蘭を描き、又山水を作る瀟酒風韻あり。後出

○水藩の藤田東湖 文武兩道に達す。文章は氣を以て勝る。

○青山佩絃齋 才思秀拔、文章流麗暢達なり。

○肥前大村藩の松林飯山 識見宏博、文辭雋爽なり。所謂維新志士中に於ては、其右に出づるもの無し、其天壽を全うせば、造詣する所、恐らくは測り難きものありしならむ。

讀秦記  
背指咸陽遠  
出宮轡轅車  
送鮑魚風沙  
中機脫沙邱  
死成就張良  
一擊功

●捐堂

蘇我兄弟  
求仇虎穴不  
辭深義勇千  
秋震士林死  
孝死忠同一  
理二蘇何讓  
二楠心  
鎮西八郎  
三十六鳥入  
弓勢源八成  
名震遠譽更  
名震遠譽更  
使兒孫長保  
國何論三箭  
定天山

○信州の佐久間象山 學、漢洋を兼ぬ文章精鍊、書も亦頗る妙なり。  
○大和の森田節齋 京師に在りて文名籍甚たり。其文精鍊簡拔、自ら機軸を出だす。法度森嚴、筆を下す苟くもせざるなり。  
○伊勢の齋藤拙堂 最も文章に秀で正にして法に泥まず。奇にして巧を銜はざるものなり、此人ありて伊勢藩一時文教盛に、海内の書生、來りて藩校に學ぶもの多し。

○其門人士井荻牙 文章筆を執れば千言立ろに成る。敢て意を経ざるもの如し。書法清勁雅脫、黃山谷の風あり。晩に八分を書す。又好みて墨竹を描く。筆法落磊、往往木たるか竹たるかを辨じ難きものあり。所謂有法無法に歸するもの也。晩に竹山水を作る。蓋其新に工夫せるもの、亦復喜ぶべし。

○九州の木下犀潭 博學を以て鳴る○草場佩川、多能多技、文詩之餘、射



讀方谷  
論陽明集  
畢生事業自  
真儒善惡何  
須爭有無四  
句一棒成妙  
訣在教後學  
費工夫

論學弊賦  
似諸生一  
闕大鏡是  
吾神只有工  
天拂點塵更  
向鏡中求鏡  
去鏡乎却誤  
幾多人

●草庵  
去松尾山  
堅坐六年松  
尾山偶然今  
日向人間身  
如流水隨緣  
動心與孤雲  
到處閑

九六

九七



新梁

馬、槍術、雅樂、歌詞に至るまで、通曉せざるなし。最も畫に達し、花卉を能くし、墨竹は其長ずる所なり。  
○陽明學派に 但馬の池田草庵、備中の山田方谷、京師の春日潜庵あり。潜庵は慷慨の士方谷は經濟に長じ、草庵は古醇儒の風あり。

安政三博士

幕府、鴻儒を藩國に抜くこと、同時に三人なるもの、前を寛政三博士といふ。柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里是れなり。後を安政三博士と曰ふ。安井息軒、齋谷宕陰、吉野金陵是れなり。前三博士は幕府極盛の時に當り、程朱學を以て天下を風靡し、徂徠、仁齋の末派、其迹を絶つに至る而して後の三博士は幕府の制規に局促たらず。卓然として古學を唱ふ。然れども當時幕政陵夷、志士論議し、天下騷然たり。三博士出づと雖も復其學術を以て天下を化すること能はず。且つ三博士亦外夷の横を憂憤し、議する所時事に在りて學術に及ぶに遑あらざる也。學政の振興せざるは、實に時世の然らしむるに由る。

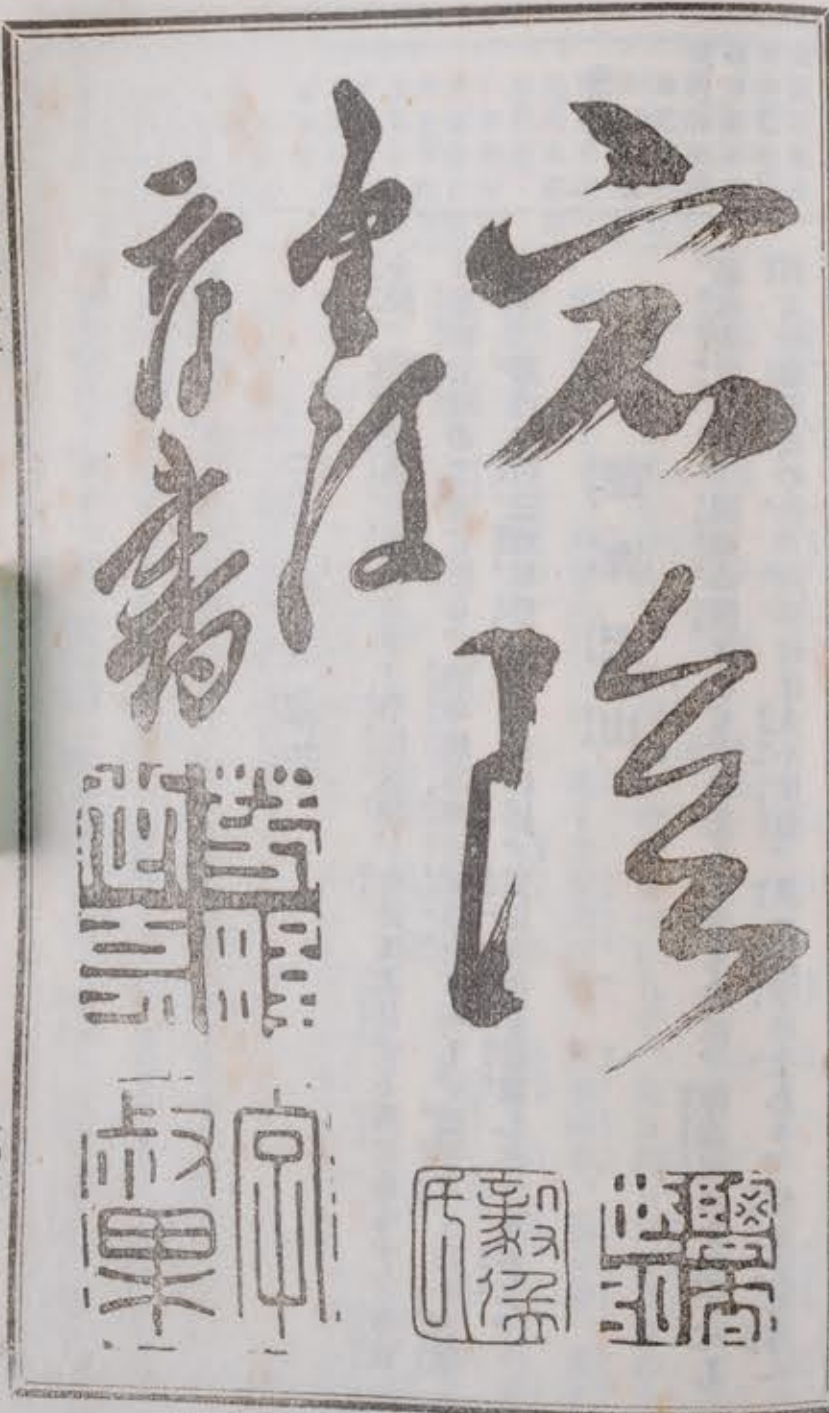


(一) 安井息軒

息軒、經學は初め衆説を折衷す。中年以後漢唐を主とす。能く先儒の未だ發せざる所を發す。文を爲くる法を唐宋に取り、上秦漢に溯る。古色蒼然たり。書は極めて拙醜、所謂金釘流なるもの也。故に手簡或は人に示す所の文稿の如きも、門人をして之を代り書せしむ。其親ら筆する所は僅に正月元旦の詩の書初等の如きもののみ。

(二) 鹽谷宕陰

宕陰、懷堂に従つて學び、又猪飼敬所に質し、文章を頼山陽に問ふ。其先儒に於ては、夙に物徂徠を推し、其經を治むる、漢註唐疏と洛閩の説とを并せ取りてこれを折衷す。然れども其長ずる所は、則ち文章にあり。矩矱





左史に出て、精悍奇變、魏勾庭に似たり。徂徠の修練、山陽の才華、兩なから之を備ふるもの也。書は敢て甚だ拙醜といふべきにあらず。而かれども筆蹟の少きは人の索に應じて、書するを好まざりしに由る歟。價貴し。

(三) 吉野 金陵

金陵、龜田綾瀬の門に出づ。學問深遠、文詩は其長する所にあらず。書法は息軒、宿陰の二士に勝る。晩年脱落老蒼頗る愛すべし。遺墨多くは一行書なり。詩の二行三行に渉るものあれば、賞玩家價を倍蓰して之を購ふ。

藤森 天山

●天山  
八幡公勿  
來關圖  
誓掃胡塵不  
顧家懸軍萬  
里向邊沙馬  
頭殘日東風

嘉永安政の頃、關東の儒にして書を善くするものは、藤森天山を推すべし。顧ふに徳川氏の世、江戸には大小侯伯、及び旗下の士あり。儒家之に事へ

幾樹花。  
男兒許國身。  
偏重幹地旋。  
天心所銘莫。  
怪溪川輕一。  
死此心附托。  
有寧馨。  
加藤清正。  
永海懸軍勢。  
戰征夷初決。  
背眼明何爲。  
華不月精翹。  
望岳情。  
平忠度。  
風流千載詞。  
華嚴欲認名。  
花作主人語。  
識難知他日。  
恨花陰獨宿。  
古都春。

て俸祿を受け、或は迎聘せられて書を講じ、以て謝を得たり。京阪の儒家は然らず、多くは徒を集めて教授するものゝみ、活計の費足らず。是に於て字を書し畫を作りて、潤筆錢を得ざるべからず。是れ即ち文墨風流の士多き所以なり、京師に於ては、近くは皆川淇園、村瀬栲亭、頼山陽、貫名海屋の書畫、星巖夫妻の畫の如き、大阪に於ては彼崎三島、其子小竹の書に見て之を徵すべし。江戸は北山、錦城、一齋、儼堂、多くは書に拙なり。畫の如きは固より作らず。天山と時を同じうしては、息軒、宿陰、金陵の三博士あり。亦皆書に妙ならず。而して獨り天山之を善くす。乃ち其索むる者門に踵を接する所以なり。潤筆錢を獲ること亦從つて多く、各地の遊歴、囊底必ず大に重し、曾て上州富岡に到りし時、潤筆錢日に七十兩に上りしといふ、晩に家を築く、講堂は三十餘疊敷に及ぶ。居室より書生塾に至るまで、規制壯大なり。諸侯の儒員を以ては、居室の新築の如き



側成 食風新綠使 心恬一枕黑 甜涼滿疹莫 道爾人無所 識隨鄉巡撫 是官衙

幾歲栖栖倦 問津滄浪今 得濯纓塵瓜 棚豆架成三 運露竹風松 是四隣

乞竹 不見黃叔度 時月歸客生 卿家有青士 瀟酒似卿清 痴若許分種 對之猶對卿

夢想だに及ばざる所なり。浪人儒者の天山が、起居自在にして、尙且つ收入多し此の如し。宜なり他の貧儒に羨望せられたることや。

天山、初め弘庵と號す。慷慨國事を論じて、幕吏に捕はれ、安政六年十月二十七日、中追放の刑に處せらる。時に年六十一。江戸を去りて下總行徳の門人に依る。是より弘庵を改めて、天山眞逸と號す。蓋易の遯の卦より取る也。遯は 三三 艮下乾上にして天山なり。遯は退き避くるの義、今や小人勢を待みて、禍を肆にす。君子意外の災厄に遭ふ。宜しく嘉遯るべきを知らばなるべし。天山は時務を知るの俊傑也。氣節を持するの豪者也。天下多事の際に遭うて、慷慨悲憤、以て一生を終ふ。而かも其書は溫潤秀活、全く其人と爲りに反す。或は曰ふ年少の時、書法を大窪詩佛より受くと、或は曰ふ楮河南に尸祝すと。其筆畫卷菱湖の風あるは、蓋し菱湖に問ひたるか。惟ふに當時菱湖の書法大に行はれ、人の心目常に之に接す

天山眞逸



天山其法を學ばずと雖、其氣を帶ぶるに至れるものに非る耶。其父名は義正、微源と號す。小野藩主一柳士佐守の祐筆たり。天山書法の妙は蓋之を天稟に得たり、晚年天山と號するに及びて、筆勢更に遒逸なり。所謂愈老いて愈熟するもの也。其細楷殊に妙なり。是れ年少窮困之餘、書估の索に應じて版下を書せるもの、其基を成せるなるべし、詩佛の詩聖堂詩集、唐の溫飛卿集、金詩選等は當時其筆するところに係る。遺墨の價、貴き所には其書法の妙なるのみにあらずして、其學問詞章にあり。其學問詞章のみにあらずして、其氣節志操にあり。

梁川星巖 妻紅蘭

是險平乳卷雪  
此叱鐵若流  
解解三峰  
軍頭他素風  
常盤抱風  
星巖  
獲生徂徠、明人李于鱗、王元美の古文辭を奉ずるや、後生影附風靡、模擬剽竊之れ事とし、口を開けば、則ち陽春、白雪、金尊、萬里、白馬、風塵、

紅粉、當壚の萬口一辭、人をして臥せんことを思はしむ。詩佛五山の徒之を病み、宋人范石湖、陸放翁、楊誠齋等が清新の詩を以て之に代らしむ。然れども其弊や纖弱鄙細、日に衰晩の氣に趨き。聖得知、分外清、頗る人をして吐棄せしむ。此時に當りて、梁川星巖、才力卓越、唐詩の高古雅健を以て之を矯む。

星巖は山本北山の門に出づ。其學初め程朱を奉じ、晩に陽明、蕺山に出入す。幼より詩を嗜むこと命の如く、初め詩佛、如亭の後に追隨して、宋詩に沈溺せしも、葛西因是の唐律を講ずるを聞くに及び、大に唐詩に歸依するに至る、而して材を取る浩博、法を持する謹嚴、上は漢魏に溯り、下は明清に逮び、諸家參稽旁求せざる無く、取りて以て運用に供す。同時賴山陽史學文章を以て一世を傾倒し、交遊廣しと雖、敢て許可する所罕なり。獨り詩に至つては最も星巖に取り、一篇就る毎に、必ず之と商略す。星巖

四季將孽骨狀  
百餘餘仙貌  
野年赫力如  
懷炎借天  
古光劉青一風  
夢枕夜漁京誤  
張頌滿秋是華  
良花良風世忘  
香吹家知  
雨客一  
滿達紙邊濛雲  
江鯉鄉落濛津  
風魚書照鳥渡  
吹秋紅浦口  
老木一磯雨  
雙連年處日詩  
驚細夢遊酒游  
洲雨裡忘此遊絲  
春問悠生感時  
帆陳他隨半



今來古往無事  
茫如石土  
入南懷天  
白雲香子  
御入南懷天  
千秋心古  
波中不一  
似早從家  
認妓早從家  
故關無磨  
孫松不無  
步去飛關  
綠春衣  
一黃石  
榮門客好  
明齊舒前  
愛吾舒前  
待富錦舒  
天富錦舒  
未全分

會て曰く、吾が名を成すものは山陽、山陽の詩を成すものは吾與つて力ありと。  
星巖既に老いて齒徳雨ながら高く、聲望日に隆なり。四方韻流、先を争うて贊を執る。名下虚士なく、俊彦輩出す。小野湖山、大沼枕山、遠山雲如、岡本黄石、鈴木松塘、宇多栗園、江馬天江、森春濤、伊藤聽秋等の如き其巨擘たり。各衣鉢を傳へ、後進に領袖す。海内の詩風殆ど之が爲に一變し、往往正宗に向ふ、論者星巖が首唱の功を推し、號して詩道の中興と爲す。星巖の一代の詩宗たる此くの如し。洵に尊ぶべし。然れども其尊ぶべき所以のものは、詩にあらずして氣節に在り。所謂維新志士なるもの、頭目たるに在り。藤森天山は、安政四年京師に至り、星巖に面して時事を談ず。江戸に還る後、人に謂つて曰く、京師に人なし、獨り星巖あるのみ、博覽多識其右に出づるものなく、眞に國事を憂ふと。以て其人と爲るを知るべし。

結秀其獨  
成力容立  
元氣表如  
始中裡美  
秀其獨  
力容立  
元氣表如  
始中裡美  
其獨  
力容立  
元氣表如  
始中裡美

星家

張綱

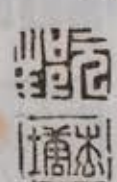
張綱

其書初年菱湖の風あり。蓋し其北山の塾に在る時、相交りて書法を問ひたるか、晩に京都に上りてより勉強して之を習ふ。頗る其風を變ず、會て曰く「餘齡六十に垂んとして始めて書を學び日に五百字を課す。亦唯た東坡



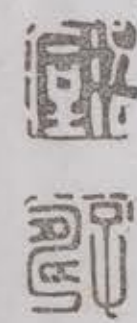
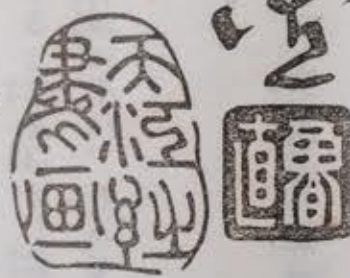
野客片河雲 六裏目淮行想 說若有飛蘿青 月語佛簾  
 群童牧牛 惜秋傷欲飛雲望僧 朝青江水舟君國送南御殘春消山芳 中夜林已  
 衣風心夕願 愁山南閣倚客 入朝容僧寂陵滿山 松樓人涼秋  
 吹無陽望懷 行 猶題秋過次 遊 挂守寧樹日懷 在笑彷彿  
 破所一山御 野 帶雨滿秦駐 清 壁蘭露花恨古

湖山六十三峰為題  
 湖山野中隱  
 黃石寺十六  
 松坡即人



出驢雨時豐中 度力落侯雲長 度力落侯雲長 出驢雨時豐中  
 風英可滿是公興 雨雄無村牧公霸 雨雄無村牧公霸  
 盤關衫生職知快 風無還馬 度牛春童亦略  
 雪 風無還馬 度牛春童亦略  
 行 笠氣論何亂 雨 背幾微說

天江雲如山人  
 槐山為人









出づとあるに至り、大に愕きて曰く、此説後漢書に出づるは、彼の傳聞に過ぎず。我正史の載せざる所也。後醍醐天皇の時、妖僧の此説を唱ふるものあるを以て、詔して其書を焚かしむ。若し此説をして行はれしめば、我神州は遂に外國の附庸とならんとすと。因りて本朝通鑑を斥けて其刊行を停む。林恕之に抗辯する能はず。幕府も亦之を公にせずして止む。今世に傳はる本朝通鑑は明治年

義公初め史局を駒込の別邸に開き、史臣をして史料を蒐集校讐せしめ、其事業次第に程を進むるに及び、寛文十二年、史局を小石川邸内に移し之を彰考館と名づけ、安積淡泊、佐佐宗淳、栗山潜峰、中村篁溪、三宅觀瀾、辻了的、人見懋齋、大串元善等諸儒をして専ら之に當り、又四方の學者を延いて館中に置き、史事に従はしむ。昔時堂上の舊記、諸家の譜牒、又は神社佛閣の文書等は、嚴秘して容易に人に示さざるを以て

貴しとなす。故に之を見んと欲すとも得ず。公の史料を集むるに當り、百方苦心、以て逸書遺文を網羅し、遂に集めて大成し、後嗣に至りて始めて其成を告げ、之を朝廷に上る。朝廷名を賜ひて大日本史と曰ふ。夫れ本朝の六國史は正史の體を具ふると雖、事を記する簡に過ぐる憾なき能はず。爾來之に繼ぐものなく、其餘の撰述は、多くは裨官野乘に類し、正史を以て之を見るべきものなし。義公の大日本史なかりせば、堂堂たる我大日本帝國に歴史の備はるなかりしなり。又公の叱責なかりせば、林家の本朝通鑑行はれて、世或は一時誤解して國祖を吳太伯の後なりとし、外を尊び内を卑しむの風を醸成する恐れなしとせず。殊に朝廷と幕府との尊卑を分ち、南朝と北朝との皇統の正閏を定むるが如きは、幕府の世に當りては、嫌疑動もすれば之に乗じ、他人之を爲すときは、林家等は決して默視すべきにあらず、識見高きもの、其議を建つること



●齊昭  
楠公の讃  
おろかなる  
身もいなる  
へに生れな  
は君かたの  
みとならま

ありとも、其身を保つこと能はず。其書を存すること能はざるべし。然るに公は地位は三家の一に居り、聲望は一代に重く、林家等と議論を異にすと雖、林家復之を如何ともする能はず。公の卓識、公の博學、公の地位共に相備はり、之に加ふるに長年月を積み、計を後嗣に遺して、遂に此大業を成就し、大義名分を明にして、以て世人をして其歸嚮する所を知らしむ。幕末志士が尊王の精神は、實に此に胚胎するもの也。即ち明治中興の隆運は、固より皇室の威稜の致す所と曰ふと雖、抑亦義公首唱の功に依らずんばあらざる也。何ぞ其れ偉なる哉。

(二) 烈公の尊攘

義公修史の舉ありてより、文教大に興り、碩學輩出す。其學風一種の特色あり。世之を水戸學と稱す。蓋し義公の聘に應ぜし學者は京儒にして、閭閻派中の人多し。京儒固より幕府の專横を惡む。一藩尊王の精神、其

しものを  
横はしら  
にのよこ  
字見てし  
りすくは  
道をゆく  
はこたて  
關のふせ  
り心せよ  
みのみよ  
御代にあ  
敵あらは  
て物見せ  
よひなば  
のねふり  
まに

原く所知るべし、而して閭閻の學は究極する所神儒の調和にあり。水戸學風亦然らざるを得ざる也。天保十二年、烈公の弘道館を開くや、自ら其記を撰りて曰く、

我が國中の士民、夙夜懈らず、斯館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教に資り、忠孝無二、文武岐れず、學問事業、其効を殊にせず。敬神崇儒、偏黨あるなく、衆思を集め、群力を宣べ、以て國家無窮の恩を報ずれば、豈徒に祖宗の志を墜さざるのみならむや、神皇在天の靈亦將に降鑑せんとす。

是に於てか、其廟に孔子を祭ると共に、武甕槌尊を祀り、西土の教に交ふるに、我神州の道を以てす。神州の道とは神を敬し王を尊ぶをいふ尊王攘夷の精神に外ならざる也。義公の後文學暫く振はず。文公に至りて復興り、高橋坦堂、長久保赤水



立原翠軒、藤田幽谷、川口長孺、青山拙齋等出づ。義公以後此時を以て最も盛なりとす。烈公の世、幕政陵夷す。適外經渡來して通商貿易を請ふ。開鎖の議論、天下に鼎沸して人人其方向に迷ふ。是時に當り烈公毅然として東海の濱に立ち、首として尊攘の論を唱へ、人心を鼓舞作興す。爲めに海内靡然として其嚮ふ所を知る。是に於て平皇室の威靈嚴然として大に顯はれ、青雲を披きて白日を觀るが如く、遂に明治中興の偉業成るを告ぐるに至る。水藩は洵に復古の指南と謂ふべし。而して其慷慨氣節の士には、藤田東湖及び其子信、戸田蓬軒、會澤正志齋、武田耕雲齋、茅根寒綠等あり。こゝに寛政以後の大儒及び烈士の小傳を録し、兼ねて其落款を收む。

立原翠軒 翠軒、立原氏、名は萬、字は伯時、別に東里と號す。通稱は甚五郎、業を餘熊耳、細井平洲に受く彰考館總裁となる。年六十二、職

を罷めて翠軒と號す。其學漢唐を奉ず。文公の侍讀となり。後彰考館總裁に遷る。又政事に參與して勸規獻替する所多し。屢幕府に上書して時政を議す。人皆其卓識に服す。文政六年三月十四日歿す。年八十。

藤田幽谷 幽谷、藤田氏、名は一正、字は子定、初め與助と稱し、後次郎左衛門と稱す。幼にして穎悟、神童を以て目せらる。松平樂翁聞きて其文辭を見んことを求む。幽谷正名論一篇を著して之を呈す。時に年十八武公、擢てて史館總裁と爲す。後濱田郡奉行と爲り、復史館總裁に遷る。哀公の時、班を通事に進めらる。居常海内の宴安に溺るゝを慨し、論議する所多し。文政九年十二月朔歿す。年五十三。幽谷人と爲り狀貌奇偉、志氣豪邁、經史及百家の學兼綜せざるなし。其子弟を教育する、名節を砥礪し、士氣を振起するを以て務となす。次子彪、東湖と號す。箕裘を繼ぐ。

川口長孺 長孺、川口氏、字は嬰卿、長孺は其名、醫を業とし 祝髮



●掛齋  
秋日偶成  
歸鴻飛盡百  
花空感慨何

して三省と稱す。文公に事ふ。人と爲り、豪邁にして才氣人に絶し、孜孜として書を読み、善く文辭を屬す。寛政中、國史總裁立原翠軒、薦めて史館に入り、侍讀を兼ねしむ。武公位を嗣ぐや、國史を總裁す。然れども性酒を好み、頗る行檢を修めず。意に是を以て譴を獲、後再び史館に入り、國史を編修す。後之を罷め、書院番に補せらる。天保五年小納戸に轉ず。時に病に罹り年を逾えて愈劇し、六年六月十日歿す。年六十三。

小宮山楓軒 楓軒、小宮山氏、名は昌秀、字は子實、立原翠軒に學ぶ。文公の位に即くや、擢てられて郡宰と爲る。民庶を慰撫して、耕職の方を講じ、治蹟大に擧がる。職に在ること二十年、晩に側用人と爲る。天保十一年三月二日歿す。年七十七。

青山拙齋 拙齋、青山氏、名は延子、字は子世、量介と稱す、雲龍、拙齋は其號。業を立原翠軒に受け最も文章に長ず。哀公の世、彰考館總

堪對碧簾無  
限春光已染  
照來紅  
夏日常成  
新筍數竿出  
屋長濃陰掩  
處午風涼高  
樓畫靜眠初  
醒金鴨綠銷  
一炷香

裁に補せらる。烈公の弘道館を建つるや、拙齋擢てられて小姓頭兼總教と爲る。天保十四年癸卯九月六日歿す。年六十八。五男あり、長は延光、次は延昌、次は延之、次は延壽、次は延方、皆學問文章を以て著はる。

立原杏所 杏所、立原氏、翠軒の子、武公、哀公、烈公に歴任して小姓頭と爲り、祿二百五十石を食む。父に従つて書を讀む。人と爲り風流溫藉、書畫篆刻に工みなり。書法は初め月儒及び文晁に學び、圓山應舉に私淑す。後古今の名跡を玩味し、最も北宗を崇び、吳小仙、戴文進等其好む所といふ。書は子昂瑞圖を摸し別に一家を成す。畫を作るに落想奇異、用筆矯變、位置形狀、工夫を究極し人意の表に出づ。鑑識を善くし、幅を覆うて其署名を射る。展べて二三寸許に至り、其誰某及び眞贋を辨じ、百に一を失はず。人以て宗漫堂の流亞と爲す。嘗て哀公の旨を奉じて鎌倉に赴き、古剝藏する所の書畫數百卷を臨摸す。是れより鑑識益進むとい



●正志齋  
逸題  
雄藩元欲育  
書生鼓涉雲  
山千里程要  
議乾坤活歷  
史須語世應  
與人情

ふ。  
豊田天功 天功、豊田氏、名は亮、彦次郎と稱し、松岡と號す。業を藤田幽谷の門に受く、拔擢せられて學職と爲り、彰考館編輯を兼ね終に總裁と爲る。元治元年甲子正月二十二日歿す。年六十。人と爲り剛果、強力絶倫、尤も史學に邃く、文章健快なり。  
會澤正志 正志、會澤氏、名は安、字は伯民、恒藏と稱す。正志は其號。別に欣賞又憩齋と號す。業を藤田幽谷に受く。文政六年進物番の上に班す。時に頻年外夷邊疆を窺ふ。正志新論七篇を著し、首として攘夷を論ず。其書大に世に行はれ、風を聞きて起つ者前後相接す。九年彰考館總裁を攝す。烈公の立つや、郡奉行、小姓頭、弘道館督學、新番頭、馬廻頭等の諸職を勤む。前後増秩四百五十石に至る。文久三年癸亥七月十四日歿す。年八十二。

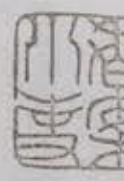
景山



翠軒主人  
立原萬壽



赤江漢才





青雲龍

卷之四



出石五士

東山先生



水戸

藤田虎書



藤田信

蓬軒

心志

耕雲子

心志



茅根春



●耕雲齋  
君が爲め誠  
の道やつく  
さん有り  
て甲斐なき  
我身なから  
も  
賤たまき數  
ならねとも  
大君の愛さ  
をはいかて  
晴らさくら  
めや  
●下喜多  
崖山樓  
崖山妖血池  
乘輿禮樂衣  
冠掃地處借  
問文章經術  
士年來畢竟  
讀何書  
●東湖  
言志  
俯思鄉國仰

武田耕雲齋 耕雲齋、武田氏、名は正生、伊賀守と稱す。小字は彦九郎と曰ふ。耕雲齋は其號、一に如雲と號す。少うして驍勇武略あり。經濟に通じ、又輜略に達す。烈公に仕へて老臣となり。祿千五百石を賜はる。藩論二派に分れ、尊王攘夷を唱ふるもの、之を正黨と稱し、佐幕開港に賛するもの之を奸黨と呼ぶ。兩派相軋る。烈公薨するに及びて正黨皆斥けらる。耕雲齋憤懣兵を擧げて濠に據る。幕府兵を發して之を討つ。耕雲齋逃れて京師に走る。越前に至りて路を失し、糧亦竭く。慶喜公の往きて諭すに會ひ、遂に幕軍に降る。慶應元年乙丑三月三日刑に就く。年六十三。

### 水藩兩田

(一) 藤田東湖

思君日夜憂  
愁南北分  
喜雨來院典  
簾錦衣玉食  
是浮雲  
同  
幽窓不許賦  
歸歟衣帶日  
寬得日疎何  
物尤爲一身  
累滿腔盡是  
古人書  
●秋日小梅  
高樓臨水水  
連雲映樓常  
山指顧中誰  
識疎簾半垂  
處九秋風物  
老英雄  
已未九月  
白髮蒼顏萬  
死餘平生豪

嘉永安政の交、海内の士、人才を論ずれば、先づ指を東湖に屈せざるべからず。東湖天資豪爽、大義を明にし、人心を正すを以て己の任とし、神を敬し武を奮ふを以て政教の根本と爲す。慷慨激烈、大事に遇ふ毎に、死を以て自ら誓ひ回避する所なし。烈公に事へて側用人兼學校奉行となる。凡そ烈公の爲す所、光明正大、天下の耳目を一新するものは、東湖の輔翼最も力あり。東湖容貌魁岸、眼光人を射る。人一見して其聰明に服す。而して才を愛し衆を容る。人寸長あれば、推奨して措かず。劇職に在りと雖も、常に異能の士を延き、酣暢談論、其欣歡を盡くし、時に或は詩賦唱酬詞采煥發す。其餘事も亦能く人を屈服す。其書法筆力雄勁俊逸、英邁の氣躍躍として紙墨の間に溢出す。東湖が三十七歳の時、横井小楠一日之を訪ふ。小楠の遊學雜誌の中に曰く。

水藩藤田虎之助を訪ふ。此人久しく名を聞けり。當時しらべ方元締と云役也。ハしらべ方元締と云は、本藩にて御奉行より御近習御取次を兼たる様の役也。其人辨舌爽に、議論甚密、學意は熊澤番



氣未全除  
刀藤染洋真  
血却懷南陽  
舊草虞

山、湯淺常山杯にて、程朱流の究理を嫌ひ、専ら事實に心懸たる様子なり。從來水戸士にて八年  
前より、江都に詰り、近日の内に、御用にて暫く下る由の咄なり。先年中納言様御家督の節、  
山の邊兵衛を介抱し、江戸に上り、大事を定しことは、其藩士の著せし龍宮物語に悉く、偏  
く世人の知る所なり、我が訪し時は、未だ退公せずして、暫待し内に歸り、直に應對極速なり  
布の肩衣、奈良の古帷子、葛の袴、膝差は鐵金具にて木綿糸を太刀巻に巻き、襷は皮包なり。當  
年三十七歳、色黒の大男、中々見事なり、都下花奢の風を嫌ひ、専ら武事に心懸け、公務の暇には  
藩中の子弟を引立、尤鎗術に達したる由なり。中納言様思召格別にて、此春の頃百石の増加  
へられ、席も被進たるなり。當時諸藩中にて、虎之助程の男は少かる可し、先年の凶荒、水戸に  
限り、三年の貯ありて、其民流亡に至らざると、風説を承りしは虚説なり。虎之助に、其節  
は極極の難境にて、僅に國民の饑を免かれたる迄なり。必竟仙臺杯に比すれば、天災も薄くして  
少しは五穀も出来たる故に、兎も角と押し凌しなり。當秋も不作なれば、一切に何の手當も不付  
今より上下氣遣するとの咄なり。

西郷南洲は不世出の豪傑なり。安政元年二月、二十八歳の時、東湖を訪ふ  
東湖時に四十九歳なり。其談論を聴き、辭して將に門を出でんとする時、

伴ふ所の樺山三圓に謂つて曰く、東湖先生を見る、恰も盜賊の親分を見る  
が如しと。他日又人に語りて曰く、天下眞に畏るべき人物無し、眞に畏る  
べきものは獨り東湖先生のみ」と。

(二) 戸田蓬軒

東湖と同じく烈公に事へて、内外相輔け、表裏相應じ、一藩の爲に善謀良  
籌を立てたるものを戸田蓬軒と爲す。而して共に安政の大震に壓死す。世  
東湖と共に水戸の兩田といふ。蓬軒、名は忠敬、通稱銀次郎。後忠太夫と  
稱す。忠太夫は烈公の賜ふ所也。天保十年側用人參政に遷り、尋ぎて執政  
と爲り大寄合頭上班に列す。弘化元年五月、烈公事に坐して致仕す。蓬  
軒亦嚴謹に罹り、祿を褫ひて礪川の第に禁錮せられ。明年小梅の別墅に従  
る。三年に至り、幕府其冤を察して始めて禁錮を解く。安政元年復執政と

●蓬軒  
神よかみよ  
しやは海の  
なかれ來て  
あたしえみ  
しに誰が任  
すべき  
霜凍る落葉  
の月の照ら  
せるは過ぎ  
にし秋のい  
るを見する  
かの爲めと  
思ひつくし  
し眞心は天  
津御神もみ  
そなはすら  
む



爲り祿一千三百石を食む。國政大小となく率ね其議を聽きて裁決す。啓沃補益、前後甚だ衆し。二年乙卯十月二日江戸地大に震ふ。蓬軒不幸壓死す年五十二。事天聽に達し、聖上震悼感惜したまふ。蓬軒は東湖の如く、筆を下せば、千言立ろに成るの才無しと雖、頗る辭藻に富みて和歌を善くす。名亦遠く東湖に及ばず書は妙ならず。

近古書畫鑑定寶典 終

大正五年三月廿七日印 刷  
大正五年四月一日初版發行  
大正六年八月十日二版發行  
大正六年十一月三日三版發行  
大正七年三月一日四版發行

大正七年九月十日五版發行  
大正八年二月九日六版發行  
大正八年七月十日七版發行  
大正九年四月廿日八版發行

書畫鑑定寶典附  
正價金壹圓也

不許複製

著	作	者	杉	原	夷	山
發	行	者	村	音	次	郎
印	刷	所	文	明	堂	印
			大	四	熊	部

東京市本郷區駒込林町貳參七  
東京市京橋區本八丁堀二ノ二

發兌元 文明堂書店

東京市本郷區駒込林町貳參七  
振替東京三八四九〇番



# 目書行發堂明文

芳川赴著	三井萬里著	矢野雉彦著	渡邊綠園著	鈴木黃軒著	中島信義著	美術木版刷	南海山人著	同人著	杉原夷山著	南海山人著	館主編	竹田紫川
彩管を持つ人に	高青邱全集	高青邱全集	蔬菜園藝	新論	美術類集	南畫名家集鑑	日本儒林明鑑	近世儒家別號集覽	近世書畫鑑定寶典	古今書畫鑑賞便覽	紫川館藏書畫落款譜	紫川館藏書畫落款譜
裝全一冊	四六判洋	貳拾壹冊	中本和裝	全一冊	菊判洋裝	大本和裝	全一冊	半紙形折	本全一葉	四六判和	裝全一冊	寸珍和裝
二〇〇〇	二〇〇〇	三〇〇〇	二八〇〇	一五〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	五〇〇	一五〇〇	一〇〇〇	五〇〇	六〇〇〇	六〇〇〇
六	六	六	六	三	四	四	二	三	六	二	二	二



